



Title	日本語と中国語における移動表現について
Author(s)	高, 一波
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67095
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

博 士 論 文

題 目 日本語と中国語における
移動表現について

提出年月 2017 年 6 月

言語文化研究科 日本語・日本文化専攻

氏 名 高一波

要 旨

日本語と中国語は移動事象を表すにあたり、まず表現形式においては様々な相違が見られる。日本語は SOV 型の言語であり、中国語は SVO 型の言語である。

移動表現の類型論から見ても日本語と中国語はそれぞれ異なるタイプの言語である。

移動を構成する諸要素として、移動物 (Figure)・参照物 (Ground)・移動の事実 (Motion)・経路 (Path)・様態/原因 (Manner/Cause) がある (Talmy (1985))。

その中、経路 (Path) は移動事象の中核スキーマであり、それには位置関係 (移動物の着点と参照物との位置関係)・経路関係 (移動物を通る経路) や方向関係 (away from や toward などが表すような方向) といった下位分類がある。

一方、様態 (Manner) は移動に伴う手足の動き・速度・手段などのような付随的要素のことを指す (Talmy (1985) ; 田中・松本 (1997))。例えば「歩く」や「走る」が表す移動物の位置変化に伴う手足が交互に (「走る」の場合はより速く交互に) 動く様も様態の一種である。

Talmy (2000) によると、中核スキーマの「経路 (Path)」がどの表現形式によって表されるかによって諸言語の類型化ができる。

日本語は移動表現において中核スキーマの「経路」を主に動詞で表すことから、動詞枠付け言語 (verb-framed language) に分類される。一方、中国語は英語と同じく中核スキーマ「経路」を衛星 (付随要素とも言う) で表すことから、衛星枠付け言語 (satellite-framed language) とされている。実際、中国語の移動表現の類型に関しては意見が分かれているが、本研究では中国語を衛星枠付け言語として扱い、中国語に見られる典型的な衛星枠付け言語との相違点を衛星枠付け言語における内部差異として扱う。

日本語と中国語は移動表現の形式において様々な相違が見られる他、互いが対応していると思われる形式も場合によっては同じ移動事象を表すことができない。

本研究では日本語と中国語における各場面の中間経路指向の移動表現を中心に考察することで、日本語と中国語における移動表現の異同を検討する。

本研究は以下の角度から移動表現を考察する。

①境界を越える移動と境界を越えない移動。

②客観方向と主観方向。

③客観移動と主観移動。

④主体移動と客体移動。

境界を越える移動とは空間の境界を越えて複数の空間場所に関する移動のことを指す。それに対し、一つの空間場所にしか関わらない移動は境界を越えない移動として扱われる。

発話者の視点が向けられる方向は主観方向であり、移動と空間場所との固有的な方向関係は客観方向である。

客観移動というのは現実にかかる移動のことを指すが、主観移動とは現実にかかっていないが、さも移動が起こっているかのような表現をとる移動のことを指す。

主体移動とは移動主と動作主が一致である場合の移動のことである。それに対し、客体移動とは移動主と動作主が一致ではない場合の移動のことを指す。

まず、境界を越える移動表現は、「交差点を渡る」「部屋から出る」「学校に入る」などといったような空間の境界を越えて複数の空間場所に関する移動表現のことを指す。それに対し、「森を彷徨う」「グラウンドを走る」というような一つの空間場所にしか関わらない表現は、境界を越えない移動表現と呼ぶ。

ある表現は境界を越える移動であるか、あるいは境界を越えない移動であるかは、その表現における移動動詞に大きく関わる。移動動詞は「経路」が含意されるか、あるいは「様態/原因」が含意されるかによって大きく二つの種類に分けることができる。

本研究は日本語の「渡る」「通る」や中国語の“过（渡る;通る;過ぎる;…）”“上（上がる;登る;…）”などのような「経路」が含意される移動動詞を経路移動動詞と呼び、日本語の「走る」「歩く」や中国語の“走（歩く）”“跑（走る）”などのような「様態/原因」が含意される移動動詞を様態移動動詞と呼ぶ。

場所名詞と共に起る際に、経路移動動詞は一般的に複数の空間領域に関わることを要求する。例えば「橋を渡る」や「山を越える」の場合において、「橋」と「橋の向こう」の境界線、「山のこっち側」と「山の向こう側」の境界線を越えることで移動行為が完成される。それに対し様態移動動詞の場合、「廊下を走った」「道を歩いた」というように移動行為が完成していても移動主が廊下/道に位置するかしないかは明白ではない。それは様態移動動詞が経路移動動詞と異なって、複数の空間領域との関わりを必ず要求するとは限らないためである。

このように、経路移動動詞と様態移動動詞は「境界越え」という点においてそれぞれ異なる性質を見せる。経路移動動詞文は一般的に境界を越える移動表現であり、境界を越えない移動表現であれば様態移動動詞が表現の中心を担うことになる。しかし、たとえ様態移動動詞が中心を担う移動表現でも、文の要素によっては境界を越える移動表現であるという可能性も存在する。

また、移動は局面によって起点指向・中間経路指向・着点指向という三つの分類に分けられる。その中で、中間経路指向はさらに経過域と経過点に分けられる。

移動の局面から見ると空間を越えない移動表現は一般的に中間経路指向の下位分類である経過域指向の移動表現である。

境界を越えない移動を表す表現形式として、中国語では“在”や“顺(着)”・“沿(着)”・“绕(着)”といった介詞構造が多用され、日本語ではヲ格やデ格が用いられる。一方、境界を越える移動を表す表現形式として、中国語では“从”や「動詞+名詞」形式(VL形式)が多用され、日本語では中間経路指向の表現だとヲ格のみを用いる。

中間経路指向とは対照に、起点指向の移動表現と着点指向の移動表現は必ず「起点/着点」と「起点/着点以外の場所」という複数の空間場所に関わるため、起点指向移動表現と着点指向移動表現は一般的に境界を越える移動表現である。

境界を越える移動であるため、起点指向の移動と着点指向の移動はそれぞれ「起点」から「起点以外の場所」へ、「着点以外の場所」から「着点」へ、というように明白な方向を示す。

本研究では、そういった移動における移動主や文脈などの要素に左右されず客観的に存在する方向のことを客観方向と呼ぶ。固有の方向関係を有する客観方向に対し、発話者の視点と関わる方向は主観方向と呼ぶ。

移動表現で用いられて移動行為が行われる場所を標示する場合、中国語の“在”介詞構造と日本語のデ格構文は形式の角度から見ると共通する部分がある。中国語の“在”介詞構造と日本語のデ格構文は共に境界を越える移動を表すことができない。また、両者とも主観方向を許容できない。しかし、中国語の“在”介詞構造は客観方向を許容できるのに対し、日本語のデ格構文は客観方向を許容できない。その他に、移動としても動作としても捉えられうる一部の移動行為に関して、もしそれを移動だと捉えるとするならば、中国語ではそれが境界を越えない移動だと認識されているものの、日本語ではそれが境界を越える移動だと認識される傾向があると思われる。

一方、同じく形式的に対応しているとされる中国語の VL 形式と日本語のヲ格構文の場合、VL 形式は V が L を支配することにより、たとえ V に様態移動動詞がくるとしても必ず結果を有するすなわち境界を越える移動を表す。それに対し、ヲ格構文は V に様態移動動詞がくる場合に境界を越えない移動を表すことができる。ここで注意すべきなのは、中国語における“跑操场（グラウンドを走る）”というように VL 形式は様態移動動詞を取りながらも境界を越えない移動を表すことができるが、それは恐らく V と L の組み合わせがイディオム化で意味が特定化し一つまとまった行為として認識されるためだと考えられる。その証拠に、“跑（走る）”のかわりに“走（歩く）”を入れ替えると意味不明な表現になる。一方、日本語のヲ格構文は「グラウンドを走る」の他に、「グラウンドを歩く」「庭を飛びまわる」などといった表現ができるというように、VL 形式より高い生産性を有する。

このように同じく他動性を表す表現形式でありながらも、VL 形式とヲ格構文では V が L を支配する際に注目が置かれる焦点が異なる。中国語は VL 形式が移動事象を表すに際して他動性により移動における位置変化の範囲が空間場所を貫通しており、すなわち移動行為が空間領域を渡るような形を取るため、移動事象に完了性が求められる。それに対し境界を越えない移動を表す際には“在”や“从”介詞構造あるいは“绕（着）”のような具体的な移動経路を示す介詞構造を用いる。

それに対し、日本語のヲ格構文の場合、位置変化の範囲は移動動詞の性質により決まる。経路移動動詞が V にくると移動行為は注目される空間場所の境界を越えるが、様態移動動詞が V にくると移動は空間場所に沿って行われるか、境界を越えない前提で空間場所全体を移動範囲として行われるかのように経路を取る。

また、様態移動動詞文は一見して無規則な経路を取るが、「グラウンドを走る」では「トラックに沿って走る」ことを、「公園を散歩する」では「公園の道に沿って歩く」ことを含意するように、実際のところ移動経路が暗示されることがある。このように経路移動動詞と様態移動動詞とそれぞれ共起するヲ格移動表現の相違及び様態移動動詞内部における相違からは、日本語のヲ格構文において V が L を支配することにより移動経路が注目されていることが分かる。それに対し、中国語では“沿（着）”“顺（着）”“绕（着）”などのような介詞を用いて具体的な移動経路あるいは軌跡を表すしかない。

以上のように、中国語と日本語は中間経路指向の移動を表す際、たとえ部分的に対応する形式であってもそれぞれ異なる着目点を有し、注目する移動の局面にも相違が見られる。

摘要

中文与日语在表达位移事件方面有种种不同之处。中文与日文分别属于 SVO 型语言和 SOV 型语言，在语言表达方式上就存在根本不同。并且根据 Talmy (2000) 的语言类型分类，中文由于主要用周边要素来表达位移的核心，所以属于卫星框架语言 (satellite-framed language)，而日语由于主要用位移动词来表达位移的核心，所以属于动词框架语言 (verb-framed language)。虽然在中文到底是不是真正属于卫星框架语言这一点还存在争论，但中文与日语在表达位移事件方面的不同还是体现得非常明显的。

另一方面，中文与日语在表达位移事件的时候也拥有一些类似的表达形式。不过这些表达形式虽然在某方面可以说是互相对应的，但却在表达特定类型位移事件时表现出细节上的不同。

本文对中文与日语中的位移表达进行了考察。考察主要是从以下几个角度进行的。

一、越境位移与不越境位移

二、客观方向与主观方向

三、客观位移与主观位移

四、主体位移与客体位移

其中，越境位移指位移事件不只与一个空间处所相关联，而不越境位移则指位移事件只与一个空间处所相关联。

客观方向指位移行为与空间处所之间客观存在的方向关系，而主观方向指的是站在说话人的立场上观察到的主观的方向关系。

客观位移指的是在现实之中实际发生的位移，这也是最常见的一种位移事件。而主观位移与之相对，指的是并非现实中真实发生的物理层面的位移事件，而是用相似表达位移的方式来表达的精神上或是抽象物体的投射事件。

主体位移指的是动作执行者与移动主体是一致的情况的位移，这是很常见的一种位移事件。而客体位移指的是动作执行者与移动主体并非同一人或同一物的情况下的位移，比如在“把球扔出去”这个句子中，的动作执行者“扔球人”与移动主体“球”并非同一个东西。

在考察越境位移与不越境位移的过程中，我们发现一个位移表达是越境还是不越境与表达中的位移动词息息相关。非方式动词的位移表达一般来说是越境的，而方式动词的位移表

达如果没有其他文脉的话一般是不越境的，但若有特殊文脉则可以参与越境位移的表达。

另外从位移事件框架来看，表起点与终点的位移表达通常是越境的，而表路径的位移表达则要看情况。本文分别对越境位移和不越境位移事件下的中文常用表达形式和日语常用表达形式作了分析和考察，发现“在”介词句和日语のデ格助词句虽然在某些方面是可以对应的形式，但“在”可以接受客观方向而デ格不能。另外也发现中文的“动词+名词”形式与日语のヲ格助词句虽然在某些方面可以对应，但其实也各自有不同的功能。

目次

要 旨.....	1
摘 要.....	5
1. はじめに.....	9
1.1 研究目的.....	9
1.2 「移動」の範囲.....	12
2. 境界を越える移動と境界を越えない移動.....	16
2.1 経路移動動詞と様態移動動詞.....	16
2.2 起点・中間経路・着点.....	17
2.3 中国語における境界を越えない移動表現.....	18
2.3.1 “在”	23
2.3.2 “顺（着）”・“沿（着）”・“绕（着）”	26
2.4 中国語における境界を越える移動表現.....	31
2.4.1 “从”	32
2.4.2 VL 形式.....	36
2.4.3 VL 形式と“从”介詞構造の相違.....	42
2.5 日本語における境界を越えない移動表現.....	45
2.5.1 フ格構文.....	46
2.5.2 デ格構文.....	48
3. 経路表現.....	50
3.1 客観方向.....	50
3.2 主観方向.....	53
3.3 日本語と中国語における主観方向表現.....	55
4. 典型的な移動表現.....	60
4.1 主体移動と客体移動.....	60
4.2 主観移動と客観移動.....	61
4.3 移動表現と非移動表現.....	62
5. 日本語と中国語における移動表現.....	67
5.1 “在”	67

5.2 “顺（着）”・“沿（着）”・“绕（着）”	69
5.3 “从”	72
5.4 ヲ格構文.....	74
5.5 デ格構文.....	76
6. おわりに.....	77
参考文献.....	79
用例出典.....	81

1. はじめに

1.1 研究目的

日本語と中国語は移動事象を表すにあたり、まず表現形式においては様々な相違が見られる。日本語は SOV 型の言語であり、例 (1a) のように一般的には主語 (Subject)・目的語 (Object)・動詞 (Verb) の順で文を作る。また、「を」「で」「に」などの格標識があり、例 (1b) のように語順も比較的に自由である。それに対し、中国語は SVO 型の言語であり、例 (2a) のように一般的には主語・動詞・目的語の順で文を作り、日本語のような格標識がない。また、中国語の語順は日本語に比べて比較的固定しているが、例 (2b) のように場合によっては目的語が前にくることもできる。

(1) a. 花子はジュースを飲んだ。

b. ジュースを花子は飲んだ。

(2) a. 花子 喝了 果汁。

huā zǐ hē le guǒ zhī

花子 飲んだ ジュース

(花子はジュースを飲んだ。)

b. 果汁 花子 喝了。

guǒ zhī huā zǐ hē le

ジュース 花子 飲んだ

(ジュースは花子が飲んだ。)

移動表現の類型論から見ても日本語と中国語はそれぞれ異なるタイプの言語である。

移動を構成する諸要素として、移動物 (Figure)・参照物 (Ground)・移動の事実 (Motion)・経路 (Path)・様態/原因 (Manner/Cause) がある (Talmy (1985))。

その中、経路 (Path) は移動事象の中核スキーマであり、それには位置関係 (移動物の着点と参照物との位置関係)・経路関係 (移動物を通る経路) や方向関係 (away from や toward などが表すような方向) といった下位分類がある。例えば例 (3) の “into the pool” では

“in” の部分は移動物の着点と参照物との位置関係を表し、“to” は経路関係を表している (Talmy (1985) ; 田中・松本 (1997))。

一方、様態 (Manner) は移動に伴う手足の動き・速度・手段などのような付随的要素のことを指す (Talmy (1985) ; 田中・松本 (1997))。例えば「歩く」や「走る」が表す移動物の位置変化に伴う手足が交互に (「走る」の場合はより速く交互に) 動く様も様態の一種である。

(3) The boy slid down into the pool in just a few seconds.

(少年はほんの数秒でプールの中に滑り降りた。)

(田中・松本 (1997))

Talmy (2000) によると、中核スキーマの「経路 (Path)」がどの表現形式によって表されるかによって諸言語の類型化ができる。

(4) ジョンは泳いで川を渡ろうとしている。

(5) 乔 试着 游 过 河。

qiáo shì zhe yóu guò hé

ジョン ~してみる 泳ぐ across 川

(ジョンは泳いで川を渡ろうとしている。)

例 (4) のように日本語は移動表現において中核スキーマの「経路」を主に動詞で表すことから、動詞枠付け言語 (verb-framed language) に分類される。一方、中国語は例 (5) のように英語と同じく中核スキーマ「経路」を衛星 (付随要素とも言う) で表すことから、衛星枠付け言語 (satellite-framed language) とされている。しかし実際、中国語の移動表現の類型に関しては意見が分かれている。中国語は英語のように動詞で様態を表し衛星で経路を表す移動表現が多く見られる。それは中国語が衛星枠付け言語に分類される主な根拠である。その一方で、例 (6) のように中国語には単独でも経路を表せる動詞もあり、そういった経路を表す動詞のみが用いられる移動表現も少なくない。そういったことや、タイ語と同じく「動詞連続構文」を用いることから中国語は第三類型の言語 (equipollently-framed languages) に分類されるべきと主張する説もあるが (Slobin (2004))、本研究では中国語

を衛星枠付け言語として扱い、中国語に見られる典型的な衛星枠付け言語との相違点を衛星枠付け言語における内部差異として扱う。

(6) 乔 过 了 河。

qiáo guò le hé

ジョン 渡る 完了 川

(ジョンは川を渡った。)

以上のように、日本語と中国語は移動表現の形式において様々な相違が見られる他、互いが対応していると思われる形式も場合によっては同じ移動事象を表すことができない。

中国人学習者による日本語での移動表現では、以下のような誤用がよく観察される。

(7) *初めて新宿の街で歩いていた時、「ヘイ！！すごい人々ですね」と私はおばあさんに言った。

(寺村 (1990:205))

(8) *そして、山の小道で歩いて帰ると、樹齢が二千七百以上の神木を見えたり、春の時に桜の花を觀賞したりして、こんな景色は人々に楽しませる。

(市川 (2010:40))

このようなヲ格とデ格の混同による誤用に関して、張 (2001) は、原因が中国語の母語干渉にあると述べた。中国語には「“在” + 場所名詞 + 動詞」という介詞構文があり、それを有する「原点」(「動作が最初から最後まで行われる場所 (孟 (1986:265) ; 筆者訳)」) を表す働きはある程度日本語のデ格と共通している。例 (7) (8) のような場合だと中国語においては「“在” + 場所名詞 + 動詞」を多用するため、その影響で中国人学習者がデ格を間違って用いてしまう。

(9) a. 太郎は公園で散歩している。

b. 太郎は公園を散歩している。

(10) a. 廊下で走らないでください。

b. 廊下を走らないでください。

一方、例（9）（10）のような多少意味が異なるがヲ格とデ格の両方とも用いられる場合もある。その場合、学習者がデ格とヲ格のどちらを用いても誤用にならないため訂正されず、ヲ格とデ格の用法を分らないままである可能性が大きい。

日本語母語話者からすると「*空で飛ぶ」などのような表現は理由が分からずとも誤用であることが分かるが、中国人日本語学習者からすると中国語だと“在空中飞（空を飛ぶ）”は言えるため、まずは「で」が用いられない理由を知りたいはずである。場所を表すデ格形式と中国語の“在＋場所名詞＋動詞”形式はある程度対応しているにも関わらず、“在空中飞（空を飛ぶ）”は言えて「*空で飛ぶ」は言えないことを含め、このような形式と意味のずれも日本語と中国語の移動表現における相違の一つである。

本研究では日本語と中国語における各場面の中間経路指向の移動表現を中心に考察することで、日本語と中国語における移動表現の異同を検討する。

1.2 「移動」の範囲

「移動表現」は一言で言えば「移動」を表す表現のことを指すが、言語表現における「移動表現」の定義と範囲はそれほど簡単に規定できるものではない。移動は人間の活動における重要な一環であり、人間の認知及び言語生活とも深い関わりを持つにもかかわらず、一部の表現が「移動」を表しているかどうかを判断することが難しい。

- (11) 部屋に入った途端ひどい悪臭が襲ってきた。
- (12) ガラス張りの吊り橋を渡るには相当勇気がいるらしい。
- (13) 町をゆったり散策するのが好きだ。
- (14) 彼は「構わない」と言いつつ、私の前に立った。
- (15) ウサギはどこかに消えてしまった。

例（11）（12）は一般的に移動表現であると認識されるが、例（13）（14）（15）は人によっては移動表現と見なされない。移動表現と見なされない理由を挙げると、例（13）の「散策」は移動よりも遊び・趣味のニュアンスが強く、例（14）（15）は共に確かに位置変化が起こっているものの、「立つ」「消える」は一般的に移動を表す動詞と見なされないため、

表現自体が移動かどうかは判断が分かれるところである。また、「ペンを花子に渡す」においてペンが移動することで「渡す」を移動動詞と見るべきかどうかも疑問が残る。

本研究で扱う移動表現の範囲として以下のようなものが挙げられる。また、これらの分類はそれぞれ別々の角度からのものであるが、互いに完全に独立しているわけではない。

①主体移動と客体移動

主体移動とは移動主と動作主が一致である場合の移動のことである。例えば例(16)(17)のような一般的に見る移動表現はそうである。

(16) 太郎は 5 km も懸命に走ったが、結局間に合わなかった。 (高 (2016))

(17) 土足で部屋に入らないでください。 (高 (2016))

それに対し、客体移動とは移動主と動作主が一致ではない場合の移動のことを指す。例えば例(18)において、移動主はボールであるが動作主は李蘭である。例(18)のような移動表現を客体移動表現と呼ぶ。本研究では客体移動表現を移動表現として扱う。

(18) 李 蘭 把 球 扔 上 来 了。

lǐ lán bǎ qiú rēng shàng lái le

李蘭 ~を~する ボール 投げる 上げる ~てくる 完了

(李蘭はボールを投げ上げてきた。)

(Christine LAMARRE (2017:96))

②客観移動と主観移動

客観移動とは移動主が物理的に存在する移動のことを指す。人や動物、交通機関、天体、水や花瓶といった物体、これらはいずれも物理的に存在するものである。それに対し、移動主が視線であったり、思いや情報であったりする場合の移動は主観移動にあたる。例えば例(19)において実際に走っているのは街道ではなく発話者の視線であり、物理的に存在するものではない。例(19)のような表現は主観移動表現と呼ぶ。本研究では主観移動

表現を移動表現として扱う。

(19) 街道は、びわ湖の東岸の野を走っている。

(国盗り)

③境界を越える移動と境界を越えない移動

境界を越える移動とは例(20)(21)のように、空間の境界を越えて複数の空間場所に関係する移動のことを指す。例(20)において、「橋を渡る」という行為は「橋」と「橋以外の場所」という複数の空間場所に関係している。その証拠に、「橋を渡ったふたり」と「ふたり」は発話の時点で「橋」にすでにいないことが明確である。例(21)の場合、「海沿いを歩く」のみだと空間の境界を越えることにならないが、「祠を見つけた」という結果や終点を示す要素があることによって「海沿い」と「祠のところ」という複数の空間場所と関わりを有することになる。また、例(16)の「太郎は5 kmも懸命に走ったが、結局間に合わなかった」という文も、「太郎は懸命に走った」のみでは境界を越えることにならないが、「5km」という太郎が走る距離あるいは移動の範囲を示す要素があるため、境界を越える移動表現として見なされる。

(20) 手をつないで、ふたりはゆっくり橋を渡った。

(メイン・テーマ)

(21) 海沿いを歩いていたら奇妙な狐の祠を見つけた。

(高(2016))

(22) どのぐらい森を彷徨ったかはもう覚えていない。

(高(2016))

それに対し、例(22)は「森」という一つの空間場所にしか関わらないため、境界を越えない移動表現として扱われる。本研究では境界を越えない移動表現を移動表現として扱う。

以上が本研究で扱う移動表現の範囲であるが、これからは本研究で移動表現として扱わない表現について説明する。

前にも述べたように、移動を構成する諸要素として、移動物(Figure)・参照物(Ground)・移動の事実(Motion)・経路(Path)・様態/原因(Manner/Cause)がある(Talmy(1985))。

その中、中核スキーマは「経路」であり、「様態/原因」はあくまで付随要素である。「太郎は走って交差点を渡った」は無論移動表現として成り立つが、「太郎は交差点を渡った」のように「様態/原因」を省略しても問題が生じない。

しかし本研究では、ある表現が移動と関係する「様態/原因」を表す要素がつけられない、あるいはつけにくい場合、その表現を移動表現として扱わない。

(23) 彼は咄嗟にしゃがんだ。

(24) 他 突然 蹲 下 了。

tā tū rán dūn xià le

彼 咄嗟にしゃがむ 下がる 完了

(彼は咄嗟にしゃがんだ。)

例 (23) の日本語表現はまず移動表現として見られないが、対応する例 (24) の中国語表現だと方向補語の“下”があるため必ずしも移動表現ではないと言い切れなくなる。しかし、“蹲 (しゃがむ)”という「様態/原因」は移動と関係するものではない上、他の移動と関係する「様態/原因」の要素に換えることもできない。“他跑上了楼梯 (彼は走って階段を上がった)”の“跑 (走る)”を“走 (歩く)”に換えても、表す事象は移動の様態以外は同じである。しかし“他蹲下了 (彼はしゃがんだ)”の“蹲 (しゃがむ)”の場合、他のどの移動と関係する「様態/原因」に換えても元の意味が完全に保てなくなる。そのため、本研究は例 (24) のような表現を動作表現として見なし、移動表現として扱わない。

2. 境界を越える移動と境界を越えない移動

境界を越える移動表現は、「交差点を渡る」「部屋から出る」「学校に入る」などといったような空間の境界を越えて複数の空間場所に関係する移動表現のことを指す。それに対し、「森を彷徨う」「グラウンドを走る」というような一つの空間場所にしか関わらない表現は、境界を越えない移動表現と呼ぶ。

ある表現は境界を越える移動であるか、あるいは境界を越えない移動であるかは、その表現における移動動詞に大きく関わる。

2.1 経路移動動詞と様態移動動詞

第1章でも述べたように、移動を構成する諸要素として、移動物 (Figure)・参照物 (Ground)・移動の事実 (Motion)・経路 (Path)・様態/原因 (Manner/Cause)がある (Talmy (1985))。

その中、経路 (Path) は移動事象の中核スキーマであり、それには位置関係 (移動物の着点と参照物との位置関係)・経路関係 (移動物を通る経路)や方向関係 (away from や toward などが表すような方向) といった下位分類がある。

一方、様態 (Manner) は移動に伴う手足の動き・速度・手段などのような付随的要素のことを指す (Talmy (1985); 田中・松本 (1997))。例えば「歩く」や「走る」が表す移動物の位置変化に伴う手足が交互に (「走る」の場合はより速く交互に) 動く様も様態の一種である。Talmy (1985) によると、移動動詞の語彙化パターンは動詞に「経路」が含意されるか、あるいは「様態/原因」が含意されるかによって大きく二つの種類に分けることができる。

本研究はそれに従って、日本語の「渡る」「通る」や中国語の“过 (渡る;通る;過ぎる;…)” “上 (上がる;登る;…)” などのような「経路」が含意される移動動詞を経路移動動詞と呼び、日本語の「走る」「歩く」や中国語の“走 (歩く)” “跑 (走る)” などのような「様態/原因」が含意される移動動詞を様態移動動詞と呼ぶ。

場所名詞と共起する際に、経路移動動詞は一般的に複数の空間領域に関わることを要求する。例えば「橋を渡る」や「山を越える」の場合において、「橋」と「橋の向こう」の境界線、「山のこっち側」と「山の向こう側」の境界線を越えることで移動行為が完成される。

また、「橋を渡った後」という移動行為がすでに完成したことを前提とする表現において、その際の移動物はすでに「橋」に位置しないという情報も含意されることから、経路移動動詞は複数の空間領域をまたがる移動事実を要求することが分かる。

それに対し様態移動動詞の場合、「廊下を走った」「道を歩いた」というように移動行為が完成していても移動主が廊下/道に位置するかしないかは明白ではない。それは様態移動動詞が経路移動動詞と異なって、複数の空間領域との関わりを必ず要求するとは限らないためである。

このように、経路移動動詞と様態移動動詞は「境界越え」という点においてそれぞれ異なる性質を見せる。しかし、様態移動動詞文であるからといって必ずしもそれが境界を越えない移動表現だとは限らない。

(25) 海沿いを歩いていたら奇妙な狐の祠を見つけた。 (高 (2016))

(26) 太郎は 5 kmも懸命に走ったが、結局間に合わなかった。 (高 (2016))

例 (25) の場合、「海沿いを歩く」のみだと空間の境界を越えることにならないが、「祠を見つけた」という結果や終点を示す要素があることによって「海沿い」と「祠のところ」という複数の空間場所と関わりを有することになる。また例 (26) においても、「太郎は懸命に走った」のみでは境界を越えることにならない。しかし、「5km」という太郎が走る距離あるいは移動の範囲を示す要素があるため、「走った 5km の空間」と「5km 先にある場所」という複数の空間場所の存在が示唆される。したがって例 (26) のような表現も境界を越える移動表現として見なされる。

以上のように、経路移動動詞文は一般的に境界を越える移動表現であり、境界を越えない移動表現であれば様態移動動詞が表現の中心を担うことになる。しかし、たとえ様態移動動詞が中心を担う移動表現でも、文の要素によっては境界を越える移動表現であるという可能性も存在する。

2.2 起点・中間経路・着点

移動は例 (27) のように局面によって起点指向・中間経路指向・着点指向という三つの分類に分けられる。例 (27a) (27b) は起点指向、例 (27c) (27d) は中間経路指向、例 (27e)

(27f) は着点指向である。

- (27) a. 食堂から出て左にまがると本屋です。
b. 太郎は映画館を出た。
c. 振り返ったら彼はもう交差点を渡っていた。
d. 病院の廊下を走らないでください。
e. 全員が目的地に辿り着いた。
f. 太郎は急いで電車で駆け込んだ。

起点指向の移動表現と着点指向の移動表現は必ず「起点/着点」と「起点/着点以外の場所」という複数の空間場所に関わるため、起点指向移動表現と着点指向移動表現はいずれも境界を越える移動表現でなければならない。

一方、中間経路指向はさらに経過域と経過点に分けられる。

経過域とは、移動主体が移動行為を行うものの、一つの空間場所にしか関わらない局面のことを指す。例えば、例 (27d) がそうであり、移動主体は「走る」という移動行為を行うが、「廊下」という空間場所にしか関わりがなく、他の空間場所の関与が明示されていない。すなわち経過域指向の移動表現は一般的に空間を越えない移動表現である。

それに対し、経過点は複数の空間場所に関わる。例 (27c) は経過点を表す表現であるが、移動主体の「彼」は「交差点」を渡る際に、「交差点」のみでなく「交差点でない場所」との関わりも示唆されている。すなわち経過点指向の移動表現は一般的に空間を越える移動表現である。

このように、移動の局面から見ると空間を越えない移動表現は一般的に中間経路指向の下位分類である経過域指向の移動表現である。

2.3 中国語における境界を越えない移動表現

中国語における移動表現の表現形式として、介詞構造・「動詞＋名詞」形式（以下略して VL 形式）及び存現文に分けられる（丸尾（2005））。その中で、境界を越えない移動表現で介詞構造が一番多く見られるため、本研究ではこの表現形式を中心に考察する。

中国語における介詞というのは語彙的な意味を持たず、標記する文中要素に何らかの文法的意味を付与する媒介として機能するものであり、英語における前置詞に似ている。実際、介詞といっても幾つかの種類があり、ここでの「介詞」は主に場所介詞を指しており、物事の所在や起点・経過点（あるいは経過域）・着点・方向を標記する。場所介詞は概ね以下のようなものがある（陈昌来（2002:73-74））。

①所在介詞

在、于、挨、挨着、当、靠、靠着 など

(28) 我 想 在 东京 住。

wǒ xiǎng zài dōng jīng zhù

私 願望（～たい） “在” 東京 住む

（私は東京に住みたい。）

（丸尾（2005:93））

(29) 别 在 桌子 上 放 东西。

bié zài zhuō zi shàng fàng dōng xī

～するな “在” つくえ 方位詞 置く もの

（机の上に物を置くな。）

（丸尾（2005:87））

(30) 他 在 树林 里 跑 着。

tā zài shù lín lǐ pǎo zhe

彼 “在” 森/林 の中 走る 持続を表す

（彼は林の中を走っている。）

（丸尾（2005:95））

(31) 宋青书 得意 洋洋 的 走 到 她 旁边， 挨着 她 坐 了…

sòng qīng shū dé yì yáng yáng de zǒu dào tā páng biān āi zhe tā zuò le

（人名） 自慢たらしく 歩く 着点 彼女 そば 隣り合わせにして 彼女 座る 完了

（宋青書は得意な顔をして彼女の傍に行き、隣り合わせに座った。）

（倚天）

②起点介詞

从、打、打从、起、由、于、自 など

(32) 大家 快 从 这儿 离开!

dà jiā kuài cóng zhè ér lí kāi

皆 早く “从” (起点を標示する) ここ 離れる

(皆早くここから離れろ。)

(丸尾 (2005:140))

(33) 他 从 村子 里 消失 了。

tā cóng cūn zǐ lǐ xiāo shī le

彼 “从” (起点を標記する) 村 方位詞 消える 完了

(彼は村から消えた。)

(丸尾 (2005:140))

(34) 你 打 哪儿 来?

nǐ dǎ nǎ ér lái

あなた “打” (起点) どこ 来る

(あなたはどこから来ましたか。)

(35) 理论 来源 于 实践。

lǐ lùn lái yuán yú shí jiàn

理論 由来する (起点) 実践

(理論は実践に起源する。)

③経過点 (あるいは経過域) 介詞

从、打、经、经由、起、顺、顺着、循、循着、沿、沿着、由、照、照着 など

(36) 河水 从 门前 流 过。

hé shuǐ cóng mén qián liú guò

川の水 “从” (經由) 門前 流れる 通る

(川が門前を流れていく。)

(陈昌来 (2002:73))

(37) 面包车 从 桥 上 开 过 来。

miàn bāo chē cóng qiáo shàng kāi guò lái

マイクロバス “从” 橋 方位詞 (車が) 移動する 通る 来る

(マイクロバスが橋を渡ってくる。)

(丸尾 (2005:141))

(38) … 从 马 路 上 走 过 来。

cóng mǎ lù shàng zǒu guò lái

(誰かが) “从” 大通り 方位詞 歩く 通る 来る

((誰かが) 大通りを歩いてくる。)

(丸尾 (2005:142))

(39) 大路 从 我家 前面 通过。

dà lù cóng wǒ jiā qián miàn tōng guò

大通り “从” 私の家 への前 通過する

(大通りが私の家の前を通っている。)

(丸尾 (2005:145))

(40) 循着 这条 小道 我们 来 到 了 老人的小屋。

xún zhe zhè tiáo xiǎo dào wǒ men lái dào le lǎo rén de xiǎo wū

～に沿って この 小道 私たち 来る 到着する 完了 老人 の 小屋

(私たちはこの小道に沿って老人の小屋に辿り着いた。)

(陈昌来 (2002:74))

(41) 照 这条 路 往 前 走。

zhào zhè tiáo lù wǎng qián zǒu

～に沿って この 道 へ 前 行く

(この道に沿って進んで (ください))

(陈昌来 (2002:74))

④終点介詞

到、即、在、至 など

(42) 你 若 不 上 武当山 来, 我 却又 到 何处 去 找 你?

nǐ ruò bú shàng wǔ dāng shān lái wǒ què yòu dào hé chù qù zhǎo nǐ

あなた もし ~しない 来る 武当山 ~てくる 私 不満を表す “到”(着点) どこ いく 探す あなた

(もしあなたが武当山に来なければ、私はどこであなたを探せばいいというの?)

(倚天)

(43) …大学毕业后 找不到 工作, 就 到 我 铺子 里 来 打工。

dà xué bì yè hòu zhǎo bú dào gōng zuò jiù dào wǒ pù zi lǐ lái dǎ gōng

大学卒業 の後 見つからない 仕事 順接 “到” 私 店 方位詞 来る 働く

((誰かが) 大学卒業後に仕事が見つからなくて、うちの店に働きにきた。)

(盗墓)

(44) 画儿 被 挂 在 正前方的 墙 上。

huà ér bèi guà zài zhèng qián fāng de qiáng shàng

絵 (対象を標記する) 掛ける “在” 真正面の 壁 方位詞

(絵は真正面の壁に掛けられている。)

(陈昌来 (2002:180))

(45) 即 此 罢手。

jí cǐ bà shǒu

~にて ここ やめる

(これにてやめよう。)

(陈昌来 (2002:180))

⑤方向介詞

奔着、奔、朝、朝着、往、向、向着、对、对着、隔、隔着、离、临、望 など

(46) 匪徒 奔 东北 跑 了。

fěi tú bēn dōng běi pǎo le

悪党 に向かって 東北 逃げる 完了

(悪党は東北のほうに逃げた。)

(陈昌来 (2002:181))

(47) 战士们 朝 天 连 打 三 枪。

zhàn shì men cháo tiān lián dǎ sān qiāng

戦士たち に向かって そら 連続して 打つ 三つ 銃 (量詞)

(戦士たちは銃を空に向けて三発撃った。)

(陈昌来 (2002:181))

(48) 那 孩子 对 南 下跪。

nà hái zǐ duì nán xià guì

その 子供 に向かって 南 跪く

(その子は南に向かって跪いた。)

(陈昌来 (2002:181))

(49) 一 群 和平鸽 飞 向 了 蓝天。

yī qún hé píng gē fēi xiàng le lán tiān

一つ 群れ (量詞) 平和のハト 飛ぶ に向かって 完了 青空

(平和のハトは群をなして青空に飛び立った。)

(陈昌来 (2002:181))

以上のように、場所介詞が標記する「場所」は主体の場合 (例 (28) など) もあれば対象物の場合 (例 (29) など) もある。また、それに関わる行為は移動行為のみならず通常の動作行為 (「銃を撃つ」「跪く」「探す」等) も含まれる。ここでは経過域指向の移動表現の場合を中心に扱い、それに関わる最も典型的な所在介詞の“在”と経過点 (あるいは経過域) 介詞の“顺 (着)”・“沿 (着)”・“绕 (着)”について議論する。

2.3.1 “在”

場所空間を標記する場合、“在”介詞構造には“在+L (場所名詞)+V (動詞)”及び“V+在+L”という二つの形式がある。一般的には“在+L+V”形式は「LにおいてVという動作が行われる (事態が発生する) こと」を表し、“V+在+L”形式は「主体あるいは対象が動作の結果Lに到達・存在すること」を表す (丸尾 (2005:85))。二つの形式とも方向性を受容しないとされている (丸尾 (2005:96))。

(50) *马儿在 草原 上 跑 过 去。 → 马儿 在 草原 上 跑 过。

mǎ ér zài cǎo yuán shàng pǎo guò qù mǎ ér zài cǎo yuán shàng pǎo guò

馬 “在” 草原 方位詞 駆ける 過ぎる ていく 馬 “在” 草原 方位詞 駆ける 過ぎる

(馬は草原を駆け抜ける。)

(51) a. *去 在 北京 → 去 北京

qù zài běi jīng qù běi jīng

行く “在” ペキン 行く ペキン

(北京に行く。)

b. *上 在 厕所 → 上 厕所

shàng zài cè suǒ shàng cè suǒ

行く “在” トイレ 行く トイレ

(トイレに行く。)

(丸尾 (2005:95))

例 (50) と例 (51) はそれぞれ “在+L+V” 形式と “V+在+L” 形式を用いているが、二つの形式とも “去” や “上” など方向性を帯びた要素と矛盾しているため非文になる。このように “在” 介詞構造はある一つの空間場所を標記するものであるため、どの形式でも方向性を受容せず、移動表現に用いられる場合は例 (52) (53) (54) のような境界を越えない移動表現の場合のみである。

(52) 鸟儿 在 天 上 飞。

niǎo ér zài tiān shàng fēi

鳥 “在” 空 方位詞 飛ぶ

(鳥は空を飛んでいる。)

(53) 鱼儿 在 水 里 游。

yú ér zài shuǐ lǐ yóu

魚 “在” 水の中 泳ぐ

(魚は水の中で泳いでいる。)

(54) 我 走 在 熙熙攘攘的 大街 上。

wǒ zǒu zài xī xī rǎng rǎng de dà jiē shàng

私 歩く “在” 賑やかな 大通り 方位詞

(私は賑やかな大通りを歩いている。)

また、例 (52) (53) (54) は移動動詞が様態移動動詞のみであるため移動表現としても捉えられれば、動作表現としても捉えられる。その場合、それらの表現における「飛ぶ」「泳ぐ」「歩く」は移動行為の様態という付随要素ではなく、独立した動作を表す。

(55) 无数的 影子 在 我 面前 走 过。

wú shù de yǐng zǐ zài wǒ miàn qián zǒu guò

無数の 影 “在” 私 目の前 歩く 過ぎる

(無数の影が目の前を通り過ぎる。)

(盗墓)

一方、例 (55) は様態移動動詞の他に方向補語の“过”もあるため動作表現として捉えられず、移動表現のみとして捉えられる。ここで注目したいのは、“过”とは本来「通る」や「通り過ぎる」などの意味を表す語である。それがあつ一つの空間場所を標記する介詞の“在”と組み合わせれば、「無数の影の通り過ぎるという移動行為が目の前という場所で行われる」の意味を表す。しかしそれを形式上の特徴を残したまま日本語に直訳すると例 (56) のような非文になる。

(56) *無数の影が目の前で (正確:を) 通り過ぎる。

また、例 (55) (56) のみではなく、上に挙げた例 (52) を形式上の特徴を残したまま日本語に直訳すると例 (57) になり、例 (54) は例 (58) になる。

(57) 鳥は空で飛んでいる。

(58) 私は賑やかな大通りで歩いている。

このように、日本語と中国語は以上のような一部の移動行為に関して、中国語ではそれが境界を越えない移動だと認識されているものの、日本語ではそれが境界を越える移動だと認識されていると考えられる。

2.3.2 “顺（着）”・“沿（着）”・“绕（着）”

介詞の“顺（着）”と“沿（着）”は文字通り動作の経路や方向を示すものであり、「～に沿って」や「～に従って」といったような意味を表す。“绕（着）”も動作の経路や方向を表す介詞であるが、“绕”そのものは本来「迂回する」「回りこむ」「回り道する」という意味を表す動詞としても用いることができる。介詞としての“绕（着）”もその動詞としての意味と関係して、迂回する経路や空間領域を回るような形を取る経路を示す。“顺（着）”と“沿（着）”の他に、意味として“顺（着）”に近い“循（着）”なども性質の面においてそれらと同様である。ここでは“顺（着）”“沿（着）”をそのような介詞の代表として紹介する。また、“绕（着）”と性質が似た介詞として“围（着）”“包（着）”などがあり、ここでは同じく“绕（着）”をそれらの代表として紹介する。

“顺（着）”・“沿（着）”・“绕（着）”は前節で見た“在”と異なって一つの空間場所を標示するものではないものの、必ず二つ以上の空間領域と関わるとも限らない。

(59) 汽车 正 沿着 海岸线 飞驰。

qì chē zhèng yán zhe hǎi àn xiàn fēi chí

車 進行を表す に沿って 海岸線 疾駆する

（車は海岸線に沿って疾駆している。）

(60) …帆船 顺着 轻风 缓缓 航行。

fān chuán shùn zhe qīng fēng huǎn huǎn háng háng

…帆船 に沿って そよ風 緩やかに 航行する

（…帆船はそよ風にしがたって緩やかに航行する。）

（高龙巴）

(61) …孩子们 绕着 石柱奔跑。

hái zǐ men rào zhe shí zhù bēn pǎo

子供たち を回って 石柱 走る

(…子供たちは石柱を回りながら走っている。)

(文化)

例 (59) (60) (61) はそれぞれ“沿 (着)”・“顺 (着)”・“绕 (着)”の例文である。これらの例文はいずれも境界を越えない移動を表している。

“沿 (着)”と“顺 (着)”の場合、それらの介詞はもとから移動行為の経路を表すものである。したがって、それらによって標示される空間場所は移動主の移動経路と重なることになる。そのため、文中に「5km」のような移動距離や移動の終点あるいは移動行為がたどりつく何らかの結果を表す要素が存在しないかぎり、“沿 (着)”と“顺 (着)”により表される移動行為がその空間場所、すなわち移動主の移動経路を越えて他の空間領域に移ることができない。

(62) a.*他已经 顺着 这条路 走 出。

tā yǐ jīng shùn zhe zhè tiáo lù zǒu chū

彼 もう に沿って この道 歩く 出る

(彼はもうこの道に沿って出ていった。)

b. 他已经 顺着 这条路 走 出 迷宫。

tā yǐ jīng shùn zhe zhè tiáo lù zǒu chū mí gōng

彼 もう に沿って この道 歩く 出る 迷路

(彼はもうこの道に沿って迷路を出ていった。)

例 (62) に見るように、例 (62a) の“顺 (着)”文において“走出 (出る)”という方向補語は“这条路 (この道)”とは別の空間場所の存在を暗示するが、その空間場所と“这条路 (この道)”の関係性を不明のままにされている。そのため、例 (62a) は非文である。ここで注意すべきは、人によっては例 (62) を自然な文だと判断する場合もあるかもしれないが、それは例 (62b) の場合と同様な捉え方をしているためである。

例（62b）の場合、“走出（出る）”の対象は“这条路（この道）”ではなく“迷宫（迷路）”である。そうすると、“走出（出る）”という移動行為がもし他の空間場所と関わろうとすればそれが“迷宫外面（迷路の外）”であり、“这条路（この道）”の制限を受けなくなる。

それと同様に、上下に文脈があれば例（62a）も“迷宫（迷路）”というような他の空間場所と関わることでできる要素が略された表現として解釈することができる。そのため、人によっては例（62a）を自然な文だと捉えることができる。

しかし実際、「5km」のような移動距離や移動の終点あるいは移動行為がたどりつく何らかの結果を表す要素が存在しないかぎり、“沿（着）”と“顺（着）”により表される移動行為がその空間場所、すなわち移動主の移動経路を越えて他の空間領域に移ることができない。それに関しては“沿（着）”も同じである。

また、例（63）（64）に見るように、“顺（着）”と“沿（着）”が用いられる表現では、「～ていく」「～てくる」のような主観方向を表す方向補語が用いられうる。“顺（着）”・“沿（着）”が表す移動は標示される空間場所を越えることはできないが、その移動は“在”の場合と異なって一つの空間場所に限定されているわけではない。“顺（着）”・“沿（着）”の表す移動経路は空間場所と重なっているため、その空間場所は移動経路とともに広がり、“顺（着）”・“沿（着）”の表す移動事象においては限界を持たないとも言える。そのように空間場所の境界に制限がないため、“顺（着）”・“沿（着）”は主観方向を受容することができる。

（63）他 终于… 沿着 他 妹妹 所 布置的 复仇的 道路 走 去 了。

tā zhōng yú yán zhe tā mèi mèi suǒ bù zhì de fù chóu de dào lù zǒu qù le

彼 結局 ～に沿って 彼 妹 動作主を標示する 準備する 復讐の 道 歩く ていく 完了

（彼は結局…妹が準備した復讐の道を行ってしまった。）

（高龙巴）

（64）孩子…顺着 那 磨损的 珊瑚石路 走 去 了。

hái zǐ shùn zhe nà mó sǔn de shān hú shí lù zǒu qù

子供 に沿って その ボロボロな 珊瑚石の道 歩く ていく

（その子は…そのボロボロな珊瑚石道路を歩いていく。）

（老人）

一方、“绕（着）”はその意味上、ある場所を巡って循環するような移動経路を示す。その移動経路には、“绕（着）”に標示される空間場所が中心であると言えるほど大きく関与している。そのため、“绕（着）”が用いられる移動表現が表す移動行為がその空間場所を越えて他の空間領域に移ることができない。

(65) a. 王 芳 绕着 操场 跑 了 几圈。

wáng fāng rào zhe cāo chǎng pǎo le jǐ quān

王芳 を回って グラウンド 走る 完了 数周

(王芳はグラウンドを数周走った)

b.*王 芳 绕着 操场 跑 进 更衣室 了。

wáng fāng rào zhe cāo chǎng pǎo jìn gēng yī shì le

王芳 を回って グラウンド 走る 入る 更衣室 完了

(王芳はグラウンドを回りながら更衣室に入った)

例 (65b) は“绕（着）”を用いながら主体が他の空間領域に移動することを表そうとする文であるが、“操场（グラウンド）”を回りながら“更衣室”という別の空間場所に入ることが不可能である。その点において、“绕（着）”は例 (62b) の“顺（着）”とは異なる。移動行為を標示する空間場所に限定するという点において、“绕（着）”は“在”と共通している。また、複数の空間場所と関わる移動事象を表すことができないため、“绕（着）”は“顺（着）”と“沿（着）”と異なり、主観方向を受容することもできない。

前節で述べたように、“在”構造は一つの空間場所で行われる移動行為を表すが、場合によってはそれが動作行為としても捉えられることができる。そのため、その移動行為に特定の移動軌跡あるいは移動経路が示されていない。

それに対し、“沿（着）”・“顺（着）”・“绕（着）”は空間場所を経路として標示するため、そこにいる移動主は時間経過につれ標示された経路に沿って移動しなければならない。

“沿（着）”・“顺（着）”の場合、前に挙げた例 (59) (60) を例として説明する。例 (59) において、“飞驰（疾駆する）”という移動動詞に対してそれが“海岸线（海岸線）”に沿って行われる行為であるということが示されている。また、その行為には時間経過と共に“海

岸线（海岸線）”に沿っての位置変化が伴われる。それと同様に、例（60）においては“轻风（そよ風）”そのものではなくそれが吹く方向に沿う航路を“航行（航行する）”の経路として示し、時間経過と共に動作主体がその経路に沿った位置変化をしなければならない。

(59) 汽车 正 沿着 海岸线 飞驰。

qì chē zhèng yán zhe hǎi àn xiàn fēi chí

車 進行を表す に沿って 海岸線 疾駆する

（車は海岸線に沿って疾駆している。）

(60) …帆船 顺着 轻风 缓缓 航行。

fān chuán shùn zhe qīng fēng huǎn huǎn háng háng

…帆船 に沿って そよ風 緩やかに 航行する

（…帆船はそよ風にしがたって緩やかに航行する。）

（高龙巴）

(61) …孩子们 绕着 石柱 奔跑。

hái zǐ men rào zhe shí zhù bēn pǎo

子供たち を回って 石柱 走る

（…子供たちは石柱を回りながら走っている。）

（文化）

一方、“绕（着）”の場合、前に挙げた例（61）を例に説明すると、“石柱”は“奔跑（走る）”という移動行為が行われる空間場所の中心となっている。“绕（着）”により、“奔跑（走る）”という行為は“石柱”を回るような形の経路を取りながら行われ、時間経過と共に位置変化が伴われる。また、その経路は“石柱”を中心として循環する形をしているため、移動行為は“石柱”が支配する空間場所により制限される。

(65) a. 王 芳 绕着 操场 跑 了几圈。

wáng fāng rào zhe cāo chǎng pǎo le jǐ quān

王芳 を回って グラウンド 走る 完了 数周

（王芳はグラウンドを数周走った）

また例 (65a) の場合だと、無論それを“操场 (グラウンド)”の外周を回る移動行為として理解することも可能である。ここではもう一つの解釈、すなわち移動主体がグラウンドの内部 (例えばトラックなど) を回るという解釈をすると、ここでの“操场 (グラウンド)”は例 (61) の“石柱”の場合と少々異なっていることが分かる。

“石柱”は点であり、それ自身に空間範囲がない。例 (61) の場合も、移動主は“石柱”そのものの内部を移動しているのではなく、“石柱”を中心とする一定範囲の空間、すなわち“石柱”が支配する空間の内部を移動している。その場合、“石柱”はその空間場所の中心点として注目され、移動経路の中心を表すことになる。

それに対し、例 (65a) の場合、“操场 (グラウンド)”自身は空間範囲を有している。加えて移動行為がその空間範囲内において行われるため、“操场 (グラウンド)”は移動経路の範囲を限定する空間として注目される。また、“操场 (グラウンド)”の中心位置 (実際にある物理的な中心位置ではなく概念上のもの) は移動経路の中心となる。

以上のように、“绕 (着)”が用いられる移動表現の場合、移動主の初期位置と移動後の位置との位置関係より、移動主と移動経路の中心との位置関係のほうが注目の焦点となっている。移動主の位置が空間場所の中心を囲むように変化し、結果的に移動経路を成している。

また、移動行為が行われる範囲を一つの空間に限定する点において“绕 (着)”は“在”と共通するが、“绕 (着)”自体が経路を表すことができるのに対し、“在”は移動が行われる空間場所を標示できるが移動の経路まで標示できない。

2.4 中国語における境界を越える移動表現

前にも述べたように、中国語における移動表現の表現形式として、介詞構造・VL形式及び存現文などがある (丸尾 (2005))。前節では境界を越えない移動表現で用いられる“在”介詞構造及び“顺 (着)”・“沿 (着)”・“绕 (着)”について考察した。この節では境界を越える移動表現の角度から、移動表現において多用される“从”介詞構造について見ていく。

2.4.1 “从”

移動表現にも用いられる“从”介詞は起点や着点となる方向、あるいは通過点や通過コースを標示する。以下のように、“从”介詞構造は起点指向の移動表現と中間経路指向の移動表現に多く見られる。

(66) 人们 从 四面八方 向 火堆 走 来。

rén men cóng sì miàn bā fāng xiàng huǒ duī zǒu lái

人々 “从” 四方八方 に向かって たき火 歩く 来る

(人々が四方八方からたき火のところへやって来た。)

(『白水社 中国語辞典』)

(67) 从 后面 赶上 来 的 同志 在 高声 问 着。

cóng hòu miàn gǎn shàng lái de tóng zhì zài gāo shēng wèn zhe

“从” 後ろ 追いかける 来る 連体 人 進行を表す 大きな声で 尋ねる 持続状態を表す

(後から追いかけて来た人が大きな声で尋ねている。)

(『白水社 中国語辞典』)

(68) 几个 人 从 他 面前 过 去 了。

jǐ gè rén cóng tā miàn qián guò qù le

幾つの 人 “从” 彼 目の前 通る 行く 完了

(数人の人が彼の前を通り過ぎて行った。)

(『白水社 中国語辞典』)

(69) 河水 从 桥下 流 过。

hé shuǐ cóng qiáo xià liú guò

川 “从” 橋の下 流れる 過ぎる

(川が橋の下を流れて行く。)

(『白水社 中国語辞典』)

例 (66) (67) で“从”は起点となる場所を標記し、例 (68) (69) では中間経路となる場所を標記している。このような起点か中間経路かという認識が明白に分別できる場合もあればそうでない場合もある。丸尾 (2005:140-144) によると、空間位置を認識する場合、

“从”によって表される起点と中間経路の捉え方に関しては次のような意味的な曖昧さが見られる。

(70) 从 这儿 能 过去 吗?

cóng zhè ér néng guò qù ma

“从” ここ 可能 渡る か

(ここから/ここを渡れますか?)

(丸尾 (2005:140))

例 (70) における“这儿 (ここ)”は、「意味的に『話者の存在場所』(起点)とも『目の前の渡る場所』(通過点)とも解釈可能 (丸尾 (2005:140))」である。丸尾 (2005:141) はこの問題に対して、「起点として捉えるか通過点として捉えるかということは、その通過点に至るまでの部分をスコープに入れるかどうかということに他ならない」というように述べている。

例えば例 (71) の場合、日の光が太陽から発され、窓を経て発話者の視野に入るとするのが事象の全貌である。その中で、“窗口 (窓)”というのはまさに“阳光 (日の光)”が太陽から窓までの経路と部屋の中という二つの空間の境に位置する「通過点」であるが、“阳光 (日の光)”が部屋の中に入る前の経路が注目されていないため、“窗口 (窓)”が起点のように捉えられている。このように異なる空間場所をわたる移動における通過点は発話者の視点によっては後半の空間の起点ともなりうるわけである (丸尾 (2005:141))。

(71) 阳光 从 窗口 射 进 来。

yáng guāng cóng chuāng kǒu shè jìn lái

日の光 “从” 窓 射す 入ってくる

(日の光が窓から射し込んでくる。)

(丸尾 (2005:141))

上述のように、“从” 介詞構造は異なる空間場所にわたる移動に関わることができ、“在” 介詞構造と異なって意味的に方向性を受容できる。またその点は文法上においても見られる。

(72) 火车 从 隧道 开 过 来 了。

huǒ chē cóng suì dào kāi guò lái le

列車 “从” トンネル (交通機関が) 移動する 通る 来る 完了

(列車がトンネルを通り抜けてきた。)

(丸尾 (2005:142))

(73) 从 马路 上 走 过 来。

cóng mǎ lù shàng zǒu guò lái

“从” 大通り 方位詞 歩く 通る 来る

(大通りを歩いてくる。)

(丸尾 (2005:142))

例 (72) (73) における“来 lái (～てくる)”は行為が発話者側に向かって実行されることを表す方向補語であり、“去 qù (～ていく)”と同じく主観方向を表す(“去”はその反対の意味を表す)。このように“从”介詞構造は“在”介詞構造と異なって方向性を持つこれらの文中の要素と矛盾しない。また、例 (74) に見るように、“从”は方向性を持たない動作表現の場合では用いられない。

(74) *我 从 大厅 唱歌。(→在)

wǒ cóng dà tīng chàng gē →zài

私 “从” ホール 歌う

(私はホールで歌う (“在” の場合)。)

(75) a. 从 城市 上空 飞 过。

cóng chéng shì shàng kōng fēi guò

“从” 街 上空 飛ぶ 過ぎる

(街の上空を飛ぶ。)

(丸尾 (2005:148))

b. 从 城市 上空 飞。

cóng chéng shì shàng kōng fēi

“从” 街 上空 飛ぶ

(街の上空を行く。)

c. 在 城市 上空 飞。

zài chéng shì shàng kōng fēi

“在” 街 上空 飛ぶ

(街の上空を飛ぶ。)

(76) a. 从 马路上 走 过。

cóng mǎ lù shàng zǒu guò

“从” 道 方位詞 歩く 通る

(道を通る/横切る。)

(丸尾 (2005:143))

b. 从 马路上 走。

cóng mǎ lù shàng zǒu

“从” 道 方位詞 歩く

(道を行く。)

c. 在 马路上 走。

zài mǎ lù shàng zǒu

“在” 道 方位詞 歩く

(道を歩く。)

例 (75a) (76a) における“过 guò (通る; 過ぎる)”も方向補語であるが、“在”介詞構造の場合においても用いられることから、それが“来/去”のように主観方向を表せないことが分かる。例 (75b) (76b) のような補語の“过”がない場合、その文の意味が具体的な移動事象を表す例 (75a) (76b) と異なって、一種の経路選択のような表現になる。そのよ

うな表現は通常「どの道を行いますか」というような移動の経路に関する疑問と対をなす答えであり、その場合飛んでいくか歩いていくかという具体的な移動手段はたいして問題にされない。ちなみに日本語において経路選択の表現は「小道を行ったほうがいい」「今回は名古屋の上空を通る」というように大抵「行く」や「通る」などといったような経路移動動詞が述語を担う。

一方、“在”介詞構造が用いられる例(75c)(76c)を見ると、前節にも述べたようにそれらの文の意味的焦点は移動つまり位置変化ではなく「飛ぶ」や「歩く」という動作自体にある。このように、“在”介詞構造は動作自体を重視し、“从”介詞構造は移動を重視する。“在”と“从”が移動表現に用いられる場合、もっとも対立的な点といえば方向性を受容するか否かである。“在”は行為や出来事を一つの空間に限定するのがその機能であるため、必然的に二つ以上の空間領域に関わる方向性と文法的に相容れない。それに対し“从”は二つ以上の空間領域との関わりを求めており、境界を越える移動表現では多用される。

2.4.2 VL 形式

VL 形式は「動詞＋名詞」の形式を指す。丸尾(2005)によると、介詞構造は用いる介詞によって表す移動の局面が異なり、例えば“从”だと起点指向・中間経路指向の移動を表すことができるが着点指向の移動を表すことができないようになっている。

一方、VL 形式の場合は次のように「V と L の結びつきが起点・中間経路・着点のどの段階を表すかは、各動詞固有なものである(丸尾(2005:52))」。また、同じ動詞は起点・中間経路・着点のどちらか一つを表すことしかできるというわけではなく、L にくるものによって V と L の関係が変わる場合もある。例えば、例(77)の“下飞机 xià fēi jī (飛行機を降りる)”だと“飞机 fēi jī (飛行機)”は起点として捉えられるが、“下坡 xià pō (坂を下りる)”だと“坡 pō (坂)”は中間経路として捉えられ、“下地 xià dì (畑に下りる)”だと“地 dì (畑)”は着点として捉えられる(丸尾(2005:52))。

(77) 【起点】: 下飞机 xià fēi jī (飛行機を降りる)、

离开重庆 lí kāi zhòng qìng (重慶を離れる)

【中間経路】: 过桥 guò qiáo (橋を渡る)、走楼梯 zǒu lóu tī (階段を歩く)、

穿胡同 chuān hú tóng (小道を通る)

【着点】： 到北京 dào běi jīng (北京に着く)、

跳海 tiào hǎi (海に飛び込む)

(丸尾 (2005:52) ; 日本語訳は筆者作成)

また、中間経路を表す VL 形式表現は例 (77) 以外にも以下のようなものがある。

(78) 如果 你 经过 她那里， 她 就 会 把 你 捉 去 做 她的奴隶。

rú guǒ nǐ jīng guò tā nà lǐ tā jiù huì bǎ nǐ zhuō qù zuò tā de nú lì

もし あなた 通る 彼女のところ 彼女 順接 将来予測 目的語標示 あなた 捕らえる 目的 になる 彼女の奴隷

(君が彼女のところを通ると、彼女は君を奴隷として捕らえるだろう。)

(緑野)

(79) 我 出 门 走下 楼梯，回到 自己 房间。

wǒ chū mén zǒu xià lóu tī huí dào zì jǐ fáng jiān

私 出る 扉 歩いておりる 階段 戻る 自分の 部屋

(僕は戸口を出て階段をおりる。そして自分の部屋に戻る。)

(海辺 ; 海辺)

(80) 因 南线 经常 受到 袭击，所以 飞机 多 飞 北线。

yīn nán xiàn jīng cháng shòu dào xí jī suǒ yǐ fēi jī duō fēi běi xiàn

～が原因で 南ルート しょっちゅう 受ける 襲撃 だから 飛行機 多く 飛ぶ 北ルート

(南ルートは襲撃を受けやすいから、飛行機の多くは北ルートを飛ぶ。)

(中国網 (www.china.com.cn) の記事による)

(81) 女孩 迟到了，老师 罚 她 跑 操场。

nǚ hái chí dào le lǎo shī fá tā pǎo cāo chǎng

女の子 遅刻した 先生 罰する 彼女 走る グラウンド

(女の子は遅刻したから先生にグラウンドを走らされた。)

(看看新聞網 (sports.kankanews.com) の記事による)

以上のように、中間経路を表す VL 形式では、経路移動動詞も様態移動動詞も用いることができる。例 (78) の“经过 jīng guò (通る)”は経路移動動詞であり、それが表す移動行為は二つの空間領域をまたがるものである。例 (79) の“走下 zǒu xià (歩いて下りる)”

は様態移動動詞の“走 zǒu”と経路移動動詞の“下 xià”を組み合わせたもので、その全体的な意味としては“下 xià（下りる）”という経路移動動詞により規定され、複数の空間場所に関わる移動行為を表す（丸尾（2005:51））。その場合、様態移動動詞の“走 zǒu（歩く）”は単に様態を表す部分であるが、「必ず余剰成分であるわけではなく、統語的に必要とされるものも存在する（丸尾（2005:51））」。例えば例（82a）の場合がそうである。

(82) a.?? 她 过 教室 门口, 顺手 把 门 锁上 了。

tā guò jiāo shì mén kǒu shùn shǒu bǎ mén suǒ shàng le

彼女 通る 教室の前 ついでに 目的語標示 扉 ロックをかける 完了

b. 她 走过 教室门口, 顺手 把 门 锁上 了。

tā zǒu guò jiāo shì mén kǒu shùn shǒu bǎ mén suǒ shàng le

彼女 通る 教室の前 ついでに 目的語標示 扉 ロックをかける 完了

（彼女は教室の前を通り過ぎる時、ついでに扉にロックをかけた。）

一方、例（80）の“飞北线 fēi běi xiàn（北ルートを飛ぶ）”の“飞 fēi”は様態移動動詞であり、動詞そのものとしては主に「飛ぶ」という様態に注目し、通常その動詞だけでは空間場所から空間場所への渡りを表すことができないはずであるが、ここでの“飞 fēi”は経路選択を表す「行く」の意味に近い。

例（83）を見て分かるように、“走 zǒu（歩く）”にもそのような用法が見られるが、“走 zǒu（歩く）”以外の様態移動動詞については意味的に大きな制約を受け、VとLの組み合わせは非常に限られる。例えば、同じく様態移動動詞としての“跑 pǎo（走る）”の場合だと、「大通りを走る」という意味での“跑大路 pǎo dà lù”は“??走大路 zǒu dà lù（大通りを行く）”のように成立しにくい。文脈によってはそれが成立する場合もあるが、厳しい言語条件が必要である。例えば走る前提で経路を問われる際、「どの道を走ればいい」という問いに対して“跑大路 pǎo dà lù（大通りを走る）”が答えとして成立する場合がある。

“飞 fēi（飛ぶ）”のそのような組み合わせにも専門用語的なものや例（80）のような文脈によるものが多い（丸尾（2005:248））。

- (83) 走楼梯 zǒu lóu tī (階段に行く) 走这条路 zǒu zhè tiáo lù (この道に行く)
走大路 zǒu dà lù (大通りに行く) 走走廊 zǒu zǒu láng (廊下を通る)

(丸尾 (2005:248))

実際、例 (81) の“跑操场 pǎo cāo chǎng (グラウンドを走る)”における“跑 pǎo (走る)”のような様態移動動詞は VL 形式において L と自由に結びつくことができず、往々にして V と L の組み合わせが定着し、ないしはイディオム化する場合が多い。

例えば、“跑操场 pǎo cāo chǎng (グラウンドを走る)”の“跑 pǎo (走る)”を“走 zǒu (歩く)”に置き換えて“??走操场 zǒu cāo chǎng”になると表現は成立しない。また、V と L の統語上の組み合わせだけでなく、“跑操场 pǎo cāo chǎng (グラウンドを走る)”の意味としても特定化しており、単に「グラウンドを走る」という移動行為を表すのではなく、「グラウンドを走って体を鍛える」あるいは例 (81) のような「罰としてグラウンドを走る」などといった定着した意味を表す。

このように、VL 形式において様態移動動詞は L との結びつきが経路移動動詞ほど自由でなく、例 (79) のように経路移動動詞と共に用いる、あるいは例 (80) や例 (81) のように特定の意味で用いるというような形以外に VL 形式に様態移動動詞が現れにくい。

移動事象を表す際に VL 形式に経路移動動詞が多く見られ、様態移動動詞が現れにくい原因として、恐らく VL 形式の統語的特性が関係すると考えられる。

中国語において「動詞＋名詞」の形式は本来、“打人 dǎ rén (人を殴る)”というような他動詞句の用法がもっとも典型的であるとされる。ヤコブセン (2001) は“打人 dǎ rén (人を殴る)”のような典型的な表現だけでなく、同じ形式を取る表現すべてにそれと同様に他動性があるはずであると主張する。例えば、“看电视 kàn diàn shì (テレビを観る)”の場合、“打人 dǎ rén (人を殴る)”の“打 dǎ (殴る)”という行為が“人”に対して変化を加えるのと異なり、“看 kàn (観る)”という行為は“电视 diàn shì (テレビ)”に対してなんらかの変化をもたらすわけではない。また、“想你 xiǎng nǐ (あなたを思う)”というような感情動詞の場合も同じく“你 (あなた)”に変化が起こるわけではない。それは移動表現の VL 形式の場合においても同様である。

しかし、ヤコブセン (2001) によると、典型的な他動詞句と同じ形式を取るそれらの表現は度合いにこそ差があるがすべて他動性を有するはずである。“看电视 kàn diàn shì (テレビを観る)”は動作主体がその行為で情報を得るという変化が起こり、“想你 xiǎng nǐ (あ

なたを思う)”も主体の感情に変動がある。さらに、VL形式を用いた移動表現の場合において、主体はその行為の実行により位置変化するという変化を被る。それぞれの表現は典型的な他動詞句と比べ他動性が劣っているが、同じ特性として動作主体がその動詞に標示される名詞を支配下に置くというように他動性を有する。

移動事象を表すVL形式において動詞が標示される場所を支配し、その場所に対して動作主体が位置変化を被る。すなわち、VL形式は移動性を要求することになる。Vに経路移動動詞がくる場合、経路移動動詞自体に移動性が内包されるためLとの結びつきは比較的に自由である。一方、様態移動動詞はそれ自体で移動性を表せるとは限らない。

例えば、例(84)のように位置変化がなくても“走 zǒu (歩く)”を用いることができ、その場合“走 zǒu (歩く)”は単に足が交互に動く様態を表す。それに対し、例(80)の“飞北线 fēi běi xiàn (北ルートを飛ぶ)”における“飞 fēi (飛ぶ)”や例(83)の“走 zǒu”は「行く」「通行する」の意味を表し、移動性を表すことができるが、そのような条件付き以外の場合だと様態移動動詞は一般的に動作の様態を重視しており、それ自身では移動性を表さない。したがって、VL形式において様態移動動詞がVに単体で現れにくい。

(84) 他 正在 原地 踏步 走。

tā zhèng zài yuán dì tà bù zǒu

彼 進行 その場 足踏み 歩く

(彼はその場で足踏みしている。)

しかし、中国語の経路移動動詞はもともと数が少ないため、VL形式のVにくる経路移動動詞が様態移動動詞に比べLとの結びつきが自由であるとは言え、中間経路を表せるものは限られている。

(85) 过：过河 guò hé (川を渡る) 过桥 guò qiáo (橋を渡る)

过马路 guò mǎ lù (道を渡る)

过草原 guò cǎo yuán (草原を渡る)

过雪山 guò xuě shān (雪山を乗り越える)

上：上山 shàng shān (山を登る) 上坡 shàng pō (坂を上る)

上楼梯 shàng lóu tī (階段を上る)

上台阶 shàng tái jiē (階段を上る)

下 : 下山 xià shān (山を下りる) 下坡 xià pō (坂を下る)

下楼梯 xià lóu tī (階段を下りる)

下台阶 xià tái jiē (階段を下りる)

通过 tōng guò (通る) 经过 jīng guò (通過する)

横穿 héng chuān (横切る) 横断 héng duàn (横断する)

穿过 chuān guò (通り抜ける) 翻越 fān yuè (乗り越える)

以上の例 (85) は中間経路を表すことのできる常用の経路移動動詞の一部を挙げたものである。その中に、イディオムとまでは言えないが、V と L の組み合わせによっては移動行為を一つのまとまった意味として表す場合も見られる。

以下のように、例 (86a) は“了 le”という完了を表すアスペクト助詞が VL の“过河 guò hé (川を渡る)”の後に置かれ、例 (86b) は“了 le”が V の“过 guò (渡る)”と L の“河 (川)”の間に置かれている。例 (86b) は V と L が“了 le”に分断されることにより、それが表す意味としては主体が「川」に対し「渡る」という移動行為を実行して位置変化を被るというように具体的な移動事象を表すことになる。

一方、例 (86a) の場合、その解釈は主体が「川を渡り始めた」と「川を渡った」というように二通りがある。「川を渡った」という解釈は例 (86a) が例 (86b) のように事象を具体的な移動事象として捉えられるということであるが、「川を渡り始めた」という解釈は“过河 guò hé (川を渡る)”の表すものが一つのまとまった行為として捉えられることを意味する。まとまった行為として捉えられる場合、その行為は具体的な移動行為のみでなく、動作行為としても認識されることが多い。そのように二通りの解釈を有する VL の組み合わせは“过河 guò hé (川を渡る)”以外にも“过桥 guò qiáo (橋を渡る)”や“上山 shàng shān (山を登る)”“下山 xià shān (山を下りる)”などがあるが、全体的に見ると数はそれほど多くない。

(86) a. 他 急匆匆地 过河 了。

tā jí cōng cōng dì guò hé le

彼 あたふたと 川を渡る 完了

(彼はあたふたと川を渡り始めた/彼はあたふたと川を渡った。)

b. 他 急匆匆地 过 了 河。

tā jí cōng cōng dì guò le hé

彼 あたふたと 渡る 完了 川

(彼はあたふたと川を渡った。)

(87) a. 他 急匆匆地 通过走廊 了。

tā jí cōng cōng dì tōng guò zǒu láng le

彼 あたふたと 通る 廊下 完了

(彼はあたふたと廊下を通過した。)

b. 他 急匆匆地 通过 了 走廊。

tā jí cōng cōng dì tōng guò le zǒu láng

彼 あたふたと 通る 完了 廊下

(彼はあたふたと廊下を通過した。)

それに対し、例 (87) に見るように、“通过 tōng guò (通る)” を用いた VL 形式の文はアスペクト助詞“了 le”の位置に関係なく「廊下を通った」という意味として解釈される。それは“通过 tōng guò (通る)”と“走廊 zǒu láng (廊下)”の結びつきは上記の“过河 guò hé (川を渡る)”ほど強くないためである。また、そのような組み合わせによって表される行為は一貫して移動行為として捉えられる。

2.4.3 VL 形式と“从”介詞構造の相違

例 (88) のように、VL 形式と“从”介詞構造は共に中間経路移動事象を表すことができる。

(88) a. 鸟雀们 鸣叫 着 从 天空 飞 过。

niǎo què men míng jiào zhe cóng tiān kōng fēi guò

鳥たち 鳴く 様態 “从” 空 飛ぶ 通る

(鳥たちは鳴きながら空を飛んでいく。)

(緑野)

b. 鸟雀们 鸣叫 着 飞 过 天空。

niǎo què men míng jiào zhe fēi guò tiān kōng

鳥たち 鳴く 様態 飛ぶ 通る 空

(鳥たちは鳴きながら空を飛んでいく。)

例 (88a) と (88b) はそれぞれ“从”介詞構造と VL 形式を用いた表現である。丸尾 (2005) によると、VL 形式が容易にイディオム化するのに対し、介詞構造の場合は具体的な移動 (実移動) を表すようになる (丸尾 (2005:249))。しかし、それはあくまで様態移動動詞が V にくる、あるいは上記に述べた“过河 guò hé (川を渡る)”のような経路移動動詞と L の結びつきが強い場合に起こり、例 (88) のように両方とも具体的な移動 (実移動) を表している場合だと、それらの間にある意味の差はそれほどはっきりと現れない。

(89) 他翻过 雪山 了。

tā fān guò xuě shān le

彼 越える 雪山 完了

(彼は雪山を越えた。)

(90) a. 他 从 雪山 翻过 了。

tā cóng xuě shān fān guò le

彼 “从” 雪山 越える 完了

b. 他 从 雪山 翻过 去 了。

tā cóng xuě shān fān guò qù le

彼 “从” 雪山 越える いく 完了

(彼は雪山を越えた。)

例（89）は VL 形式を用いた中間経路表現であり、例（90）は“从”介詞構造を用いた中間経路移動表現である。しかし例（89）の VL 形式においては“翻过 fān guò（越える）”が“雪山 xuě shān（雪山）”との組み合わせで直接移動事象を表すことができるのに対し、例（90a）の“从”介詞構造においては“翻过 fān guò（越える）”のみでそのような移動事象を表すことができず、例（90b）のように“去”のような方向補語を加えなければならない。ここで“来/去”に求められるのは主観方向というよりも移動行為の完了である。杉村（2000:157）によると、“来/去”は語彙的意味の働きによって言語化されない移動の終点あるいは起点というような限界点を表すことができる。

実際、そのように方向補語の“来/去”が必要であるのは“翻过 fān guò（越える）”以外にも、“走过 zǒu guò（歩いて通り過ぎる）”や“跑过 pǎo guò（走って通り過ぎる）”などといった“翻过 fān guò（越える）”と同じような様態移動動詞と経路移動動詞の組み合わせで複合的な移動事象を表すものがある。

ところがなぜ例（88a）の“飞过 fēi guò（飛ぶ）”は“来/去”がなくても文が成立するかというと、それは例（88a）に“了 le”というような完了を表す要素がないためであると考えられる。例（88a）の表す意味にその移動行為がまだ完了しておらず未だに進行中であるということが含意され、“来/去”がなくても文が成立する。一方、例（89）と例（90）では“了”により動作の完了が要求され、例（89）の VL 形式だと“来/去”が省略可能であるのに対し、例（90）の“从”介詞構造の場合だと“来/去”をもってその移動行為の完了を表さなければならない。

そのような統語的な違いは両者の意味上の違いにも関係する。中間経路を表す場合、“从”介詞構造が表す移動事象は空間的に制限を受けない。

それに対し、VL 形式においては V が L を支配し、それ自体に行為の完了あるいは限界を有している。また、V と L の組み合わせがフリーではないということからも分かるように、V と L の結びつきは強く、L 全体が移動行為の経路であり主体の位置変化の範囲となっている。

このように、VL 形式による表される中間経路事象において、移動主体の初期位置及び移動後の位置は注目される空間場所に存在せず、その間を繋ぐ移動関係は空間場所を貫通する。それはすなわち、移動行為が空間場所を支配することにより、その空間場所全体は移動の経路として認識され、その空間場所内部に起こる具体的な移動様態などに関しては

それほど問題にされないということである。また、移動事象は注目される空間場所のみでなく他の空間場所にも必ず関わり、初期位置と移動後の位置が必ずそれぞれ異なる空間場所にある。そのため、たとえ“翻过 fān guò (越える)”が表すような移動事象の場合であっても、VL形式は“来/去”がなくても完了性あるいは結果を有する移動事象を表すことができる。

また、移動主の初期位置が注目される空間領域外にも存在することができる。それは一つのまとまった動作行為としても捉えることができる“过河 guò hé (川を渡る)”のようなVとLに強い結びつきのあるVL形式文においてもっともよく見られる。その場合、主体が空間領域を移動して他の空間領域に移る時だけでなく、移動主が注目される空間領域外の初期位置から注目される空間領域に入った瞬間にもその行為に完了性が認められる。例(86a)の“他过河了 tā guò hé le (彼は川を渡った/渡り始めた)”に二つの解釈ができるというのはそのためだと考えられる。

2.5 日本語における境界を越えない移動表現

日本語における中間経路指向の移動表現は主に例(91)(92)のようなヲ格構文により実現される。他にも例(93)のような「に沿って」「にしたがって」などといったような移動経路を標示できるものが存在するが、全体的に見ると中間経路指向の移動表現を表せる形式は中国語ほど多様ではない。

(91) そんなことから旅人も自然に桜の森の下を通らないで、わざわざ遠まわりの別の山道を歩くようになり…

(桜)

(92) 彼は小鳥や鹿をとりに山を走りました。

(桜)

(93) 三人は、うす暗い、建物の壁にそって歩いていました。

(石段)

上記の例文に見られるように、ヲ格構文は中間経路移動事象を表すに際してもっとも一般的に用いられる表現形式である。これからはヲ格構文を中心に日本語の中間経路指向(特

に経過域指向)の移動表現について議論する。

2.5.1 フ格構文

フ格構文は一様に「L+を+V」という形式を取るが、Vにくる動詞が経路移動動詞か様態移動動詞かによって表す移動事象が異なる。経路移動動詞がくるのは一般的に境界を越える移動表現の場合である。一方、様態移動動詞がくるのは境界を越える移動表現の場合でも境界を越えない移動表現の場合でも観察される。ここでは主に様態移動動詞の場合を見ていく。

様態移動動詞がVにくる場合、「5km」のような移動距離や移動の終点あるいは移動行為がたどりつく何らかの結果を表す要素が存在しないかぎり、以下の例が示すように移動事象は通常一つの空間領域で行われる。

(94) 狼はみんな歌を歌って、夏のまはり燈籠のやうに、火のまほりを走つてみました。

(狼森)

(95) 私はハドソン河畔を散歩するたびに、死骸の浮いていたのはこの辺だったろうかな
どといつもこのポーの小説を思い起こした。

(科学)

(96) 子供たちは、よろこんでそのまほりを飛んだりはねたりしました。

(狼森)

例(94)(95)(96)に見られる「走る」「散歩する」「飛ぶ/はねる」は様態移動動詞であり、どちらも動作や移動の様態を中心として表す。特に例(94)の「走る」に比べ、例(95)の「散歩する」は移動動詞というよりも百科事典的に位置変化を含意する動作動詞寄りの動詞である。さらに例(96)の「飛ぶ/はねる」は動作動詞として働くのが一般的であるが、ここではフ格によって移動行為を伴う様態を表すようになる。

フ格構文は他動詞句がもっとも典型的な用法であり、その構文自体に他動性があると考えられる。そのため、空間場所のLはVにくる様態移動動詞に支配され、空間場所全体がその行為の行動範囲になる。「走る」「散歩する」のような時間の経過とともに自然に位置変化を伴う様態移動動詞はともかく、文脈によっては「飛ぶ/はねる」のようなもともとそ

れ自体に位置変化を伴わない動詞でも、「飛びながら移動する」というような移動行為を表すことができる。

また様態移動動詞が中心を担う経過域指向の移動表現では、例（94）（96）のような移動経路が定かでなく、移動主が空間場所全体を範囲に無規則に動き回る場合と、例（95）のような注目される場所空間そのものを経路として移動する場合という二種類の移動事象を表すことができる。

例（94）（96）のような移動主が空間場所全体を範囲に無規則に動き回る場合、移動主体の位置変化は注目される空間場所内に起こり、他の空間領域に移ることはない。また、例（97）を見ると「グラウンドを走る」という行為に対し、「グラウンドのトラックに沿って走りまわる」というような認識の仕方もできることが分かる。このように他動性を有するヲ格構文の働きにより経路が完全的に無規則ではなく、経験や文脈によってある程度想定される場合も存在する。

（97）花子はグラウンドを走っている。

一方、例（95）のような注目される場所空間そのものを経路として移動する場合、ヲ格構文の V にくるのは様態移動動詞であるため、空間領域そのものが移動経路となっているとはいえ、移動主体の位置変化は経路が無規則である場合と同様に一つの空間場所内に行われる、あるいは一つの空間場所内にかかる位置変化のみが注目されると考えられる。しかし、その移動自体は次の言語化段階で他の空間領域に移ることが許される。

例（98a）のような循環するような移動経路を有する移動の場合、「教室に着いた」という移動の結果を表し、他の空間場所に関わるような要素を加えると文が不自然になる。それに対し、例（98b）のような循環しない移動経路を有する移動の場合、「山道を走る」という移動行為自体は「山道」という一つの空間領域に行われるものであるが、その移動の延長として「神社に着いた」というように移動の結果も表せることで他の空間場所に関わることが許される。

また、例（99）にも同じ対照が見られる。「～ていく」という他の空間場所との関わりを暗示する要素は例（99b）のような移動経路が循環しない移動の場合では用いられるが、例（99a）のような移動経路が循環する移動事象の場合だと不自然である。

(98) a.??花子はグラウンドを 30 分走ってようやく教室に着いた。

b. 花子は山道を 30 分走ってようやく神社に着いた。

(99) a.??花子はグラウンドを走っていった。

b. 花子は山道を走っていった。

また、ヲ格により直接に標示される空間場所は動詞に支配されるため、その空間場所は移動事象における移動経路として移動行為に支配される。

2.5.2 デ格構文

日本語のデ格構文は例 (100) (101) (102) (103) の示すように、場所を表すデ格は主に動作行為が行われる場所を標示し、その行為を標示する空間場所に限定する機能を有する。

その中で、例 (102) と例 (103) における「泳ぐ」や「歩き回る」のような移動動詞が述語を担う場合も見られる。その場合、注目されるのは位置変化ではなくその動作そのものである。

例 (102) では主体の位置が変化するかどうかは問題にされず、「波や潮の流れの中」という特定の場所で「泳ぐ」という動作が行われることが注目の焦点である。例 (103) において「歩き回る」も主体になんらかの位置変化をもたらすわけではなく、「歩き回る」ことによってぶらぶらしてお店に迷惑をかけるという特定の動作行為を表す。

(100) 彼女は、明るい場所で休むと、ただれかにしかられはしないかという不安があったからです。

(石段)

(101) あの花ざかりの林のまんなかで、…思いつき地べたに坐ってやろう、と彼は考えました。

(桜)

(102) 波や潮の流れの中で泳ぐのは普段使わない筋肉を使う場合があります。

(海上保安庁オフィスサイト <http://www.kaiho.mlit.go.jp/>)

(103) お店で歩き回る幼児をどうにかして欲しい。

(発言小町 <http://komachi.yomiuri.co.jp>)

ところが、“在” 介詞構造と同様ように、デ格も移動行為が行われる場所を標示することができる。例 (104a) において「走り去る」というのはかならず主体に位置変化をもたらす行為である。その場合、デ格構文は例 (105) のヲ格文と異なって、一定時間内に「目の前」という空間場所を主体から離れるように移動するというような具体的な移動過程よりは、そのような移動行為自体、言い換えれば主体が位置変化した瞬間に実行される行為自体に注目する傾向がある。例 (104b) (105b) を見れば分かるように、ヲ格文の場合は注目される空間場所の境界を越えるまで「三秒」かかった移動事象を表す。それに対し、デ格は主体が移動行為に移行した瞬間の動作に焦点をあて、位置変化を伴う動作行為を表すため「三秒で」という行為に時間制限を加える要素をそれほど受容しない。このように、デ格構文は移動事象の経路などを表すことができず、表せるのは動作に伴う位置変化の事実のみである。

(104) a. バスは目の前で走り去った。

b. ?バスは目の前で三秒で走り去った。

(105) a. バスは目の前を走り去った。

b. バスは目の前を三秒で走り去った。

以上のように、デ格構文は経過域指向の移動表現に用いることができるが、表す意味は動作表現に近い。

3. 経路表現

3.1 客観方向

移動は局面によって起点指向・中間経路指向・着点指向という三つの分類に分けられる。その中で、中間経路指向はさらに境界を越えない移動表現の経過域指向と境界を越える移動表現の経過点指向に分けられる。

中間経路指向とは対照に、起点指向の移動表現と着点指向の移動表現は必ず「起点/着点」と「起点/着点以外の場所」という複数の空間場所に関わるため、起点指向移動表現と着点指向移動表現は一般的に境界を越える移動表現である。

境界を越える移動であるため、起点指向の移動と着点指向の移動はそれぞれ「起点」から「起点以外の場所」へ、「着点以外の場所」から「着点」へ、というように明白な方向を示す。

本研究では、そういった移動における移動主や文脈などの要素に左右されず客観的に存在する方向のことを客観方向と呼ぶ。

例（106）（107）はそれぞれ、“出”という方向補語と“离开（離れる）”という経路移動動詞により客観方向を示している。それらの移動が「起点」とするのは「北京」と「教室」という固有な空間場所であり、「起点以外の場所」とするのは「北京以外の場所」と「教室以外の場所」である。それらの表現で見られる移動の方向は「北京」から「北京以外の場所」へ、「教室」から「教室以外の場所」へというような非常に明白なものであり、いずれも客観方向である。

（106）列车 从 北京 开 出 了。

liè chē cóng běi jīng kāi chū le

列車 “从” ペキン（交通機関が）移動する 出る 完了

（列車は北京から出発した。）

（『白水社 中国語辞典』）

(107) 小 明 立刻 离开 了 教室。

xiǎo míng lì kè lí kāi le jiāo shì

小明 すぐ 離れる 完了 教室

(小明はすぐ教室を出た。)

このような起点指向の移動表現における客観方向を視覚的に示すと図 1 になる。影山 (2001)・丸尾 (2005)・杉村 (2006) を参考に作成している。

図 1

※ 実線の長方形は事象が言語化される際に注目される空間領域を表し、点線の長方形は注目されていない空間場所を表す。矢印は移動が向けられる方向を表す。

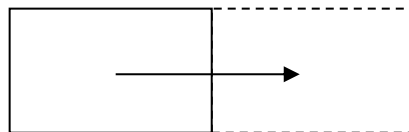


図 1 に示されているように、起点指向の移動表現において移動の起点となる空間領域が注目される。また、その移動行為の移動主は必ず注目される空間領域を離れ、別の空間場所に向かうため、客観方向の指向としては注目される起点の場所からその他の空間場所へ向けられる。

起点指向の客観方向の他に、例 (108) (109) のように着点指向の移動表現にも客観方向が見られる。

(108) 他 跑 进 车站 了。

tā pǎo jìn chē zhàn le

彼 走る 入る 駅 完了

(彼は走って駅に入った)

(109) 他们 在 逃 到 杭州的 时候…只能 求助 于 我 爷爷。

tā men zài táo dào háng zhōu de shí hòu zhī néng qiú zhù yú wǒ yé yé

彼ら 時間を表す 逃げる に 杭州 の 時 …するしか 助けを求める 対象を表す 私 お爺さん

(彼らは杭州に逃げていた時…うちの爺ちゃんに頼るしかなかった)

(盗墓)

このような着点指向の移動表現に見られる客観方向を視覚的に示すと図 2 になる。

図 2

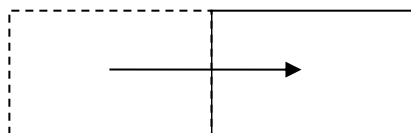


図 2 のように、着点指向の移動表現において移動の目的地あるいは着点となる空間場所が目される。起点指向の場合とは反対に、着点指向の移動行為において移動主は注目される空間場所に到着する前に必ず別の空間領域を経由するため、着点の場所以外の空間場所の存在が暗示される。その場合、移動の客観方向の指向は他の空間場所から注目される着点の場所へ向けられる。

一方、客観方向を示す移動表現は必ずしも起点指向移動表現や着点指向移動表現のように境界を越える移動を表すとは限らない。

例 (110) において、移動主は「ロンドンに向かう」という移動を起こす。その移動には「ロンドンに向かう途中」という空間場所が関わるが、「ロンドン」が関わっておらず、他の空間場所も関わっていない。しかし、移動が向けられる方向は明白であり、移動と「ロンドン」との間に固有の方向関係を有する。そのため、例 (110) のような移動表現は境界を越えない移動表現であるが、客観方向を有すると考えられる。

(110) ロンドンに向かう途中、カナダのグース・ベイ飛行場にて、天候回復を待つこと十二時間。

(デンマーク)

3.2 主観方向

固有の方向関係を有する客観方向に対し、発話者の視点と関わる方向は主観方向と呼ぶ。
また、主観方向の存在は客観方向と矛盾せず、同一表現において同時に出現することができる。

(111) 他 从 教室 跑 出 去 了。

tā cóng jiāo shì pǎo chū qù le

彼 “从” 教室 走る 出る ていく 完了

(彼は教室から走って出ていった。)

(112) 他 从 教室 跑 出 来 了。

tā cóng jiāo shì pǎo chū lái le

彼 “从” 教室 走る 出る てくる 完了

(彼は教室から走って出てきた。)

(113) 他 跑 进 教室 去 了。

tā pǎo jìn jiāo shì qù le

彼 走る 入る 教室 ていく 完了

(彼は教室に走って入っていった。)

(114) 他 跑 进 教室 来 了。

tā pǎo jìn jiāo shì lái le

彼 走る 入る 教室 てくる 完了

(彼は教室に走って入ってきた。)

例 (111) と例 (112) は起点指向の移動表現であり、客観方向としては同じく“教室”という起点領域から別の空間領域に向けられるが、“去 (ていく)”と“来 (てくる)”という方向補語によって両表現における発話者の視点による方向は異なっている。一方、例

(113) と例 (114) は着点指向の移動表現であり、それらの客観方向は共に着点の場所である“教室”に向けられるが、例 (111) (112) の場合と同様に“去”と“来”によって発話者の視点による異なる方向を示している。

図 3

※ 人の顔は発話者を表し、太い矢印はその目線が向けられる方向を表す。

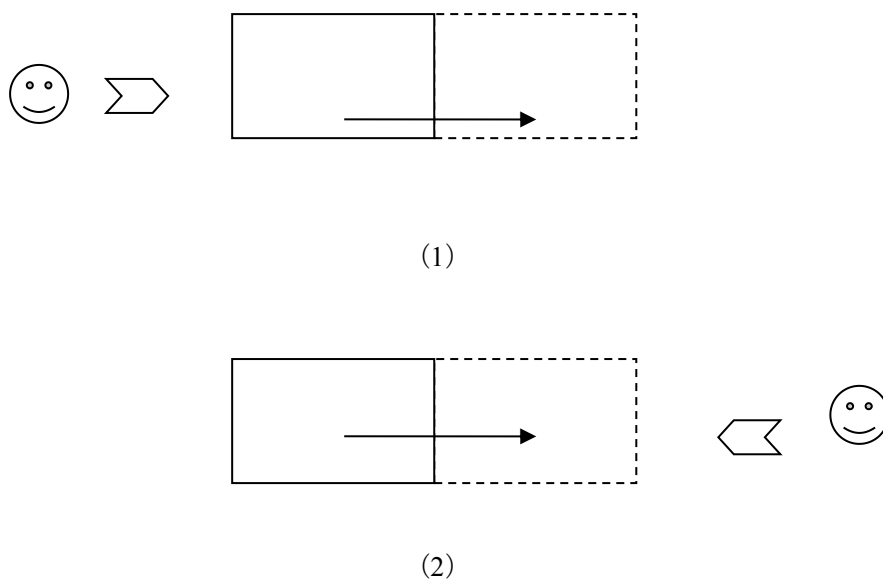
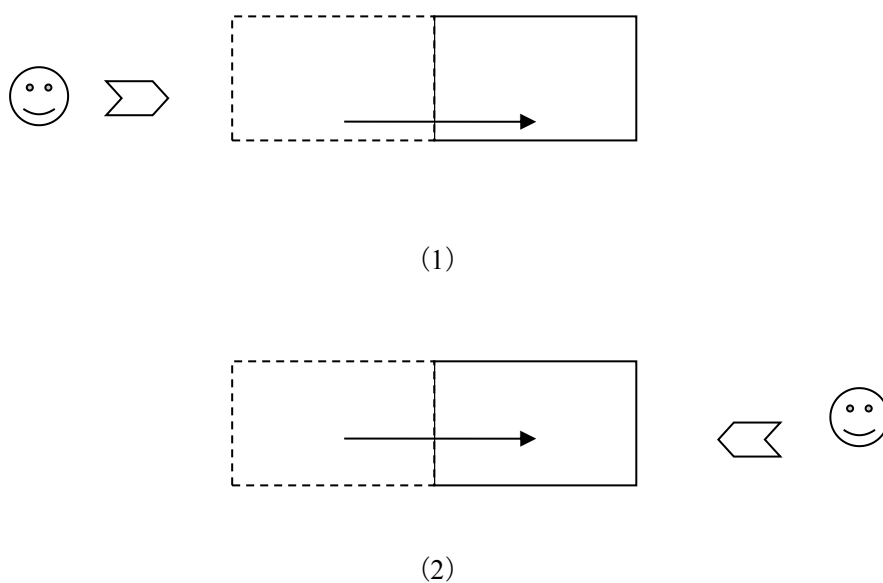


図 4



同じく起点指向の移動表現であるが、例（111）と例（112）はそれぞれ図3の（1）（2）が示しているように、発話者の視点すなわち対象事象に対する目線が向けられる方向が異なる。

例えば、例（111）の“他从教室跑出去了（彼は教室から走って出ていった）”という表現において、移動の客観方向としては起点の“教室”から別の空間場所に向けられている。その事象を発話者が起点側の立場から発話すると、発話者の目線が向けられる方向は移動そのものが向けられる方向（客観方向）と一致しており、移動主が発話者側から離れていくというように移動が捉えられる。

それとは反対に、例（112）の“他从教室跑出来了（彼は教室から走って出てきた）”の場合だと、発話者は起点の“教室”とは反対の立場、つまり移動行為が向けられる側の方向から発話していることになる。そうすると、その目線は移動の客観方向とは反対の方向に向けられることになり、表現される移動事象も移動主が発話者の立場の方向に向かって移動するように捉えられる。

例（113）（114）のような着点指向の移動表現の場合はそれぞれ図4の（1）（2）になる。

同じく着点表現であるが、例（113）の“去”文は図4（1）のように移動行為の向けられる着点と反対の方向から発話者が事象を認識している。そのため、発話者の目線は着点の方向に向けられており、移動の客観方向と一致している。その場合、例（111）の“去”文（起点指向）と同様に、例（113）の主観方向はすなわち移動そのものが向けられる方向（客観方向）と一致する方向である。その場合の移動は発話者の視点から移動主が自分側を離れていくというように捉えられる。

それに対し、例（114）の“来”文は図4（2）が示すように、発話者が着点側の立場から事象を捉え、その目線の方向は移動行為の着点に向けられる客観方向と逆になる。その場合、主観移動は例（112）の“来”文（起点指向）と同じように、発話者の目線の向けられる方向が移動の向けられる方向と反対になる。そのため、その場合の移動は発話者の視点から移動主が自分側に向かってくるというように捉えられる。

3.3 日本語と中国語における主観方向表現

発話者の視点と関わる主観方向の表現形式として、日本語の「てくる」「ていく」と中国語の“来”“去”が挙げられる。

「ていく」「てくる」と“来”“去”はどのような場合でも用いられるわけではない。例(114)(115)を見て分かるように、「ていく」「てくる」と“来”“去”は移動の主観方向を表す際、“在”やデ格が用いられるような場所が限定される場合において用いることができない(丸尾(2005))。

(114) *彼は庭で遊んでいく。

(115) *他 在 庭院中 玩耍 去。

tā zài tíng yuàn zhōng wán shuǎ qù

彼 場所を表す 庭の中 遊ぶ ていく

(*彼は庭で遊んでいく。)

ところが、例(116b)(117b)は“在”やデ格により場所が制限されているわけではない。しかし、それらはそれぞれ例(116a)(117a)と同じ移動動詞が中心を担うにもかかわらず文が不自然になるということは、移動経路に問題があると考えられる。

(116) a. 花子は山道を走っていった。

b. ? 花子はグラウンドを走っていった。

(117) a. 小明 顺着 小巷 跑 去。

xiǎo míng shùn zhe xiǎo xiàng pǎo qù

小明 に沿って 小道 走る ていく

(小明は小道を走っていく。)

b. ??小明 绕着 操场 跑 去。

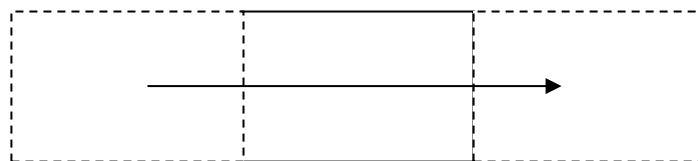
xiǎo míng rào zhe cāo chǎng pǎo qù

小明 を回って グラウンド 走る ていく

(小明はグラウンドに沿って走っていく。)

まず、例(116)(117)は起点指向や着点指向ではなく、中間経路指向の移動表現である。例(116a)(117a)のような一般的な中間経路指向の移動を図に表すと以下のようなになる。

図 5



この場合、主観方向は前述した起点指向と着点指向の場合と同じように、発話者の視点と移動方向の相互関係が表現される。しかし、中間経路にいくつかのパターンがある。起点指向の移動表現において注目される空間場所が常に起点であるのとは異なり、中間経路の移動表現において注目される空間場所は常に移動経路と重なるのではなく、ただ移動経路が辿る可能な範囲を示すこともある。

例えば、「境界を越える移動と境界を越えない移動」の章でも述べたように、例（118）（119）の「火のまはり」「そのまはり」は移動の具体的な経路ではなくその移動範囲を表している。それを図に示すと図 6 のようになる。

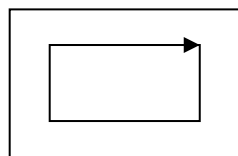
（118）狼はみんな歌を歌って、夏のまはり燈籠のやうに、火のまはりを走つてみました。

（狼森）

（119）子供たちは、よろこんでそのまはりを飛んだりはねたりしました。

（狼森）

図 6



日本語では、例（116a）のような注目される空間場所が移動経路と重なる場合も、例（118）（119）のような注目される空間場所が移動経路の範囲を示す場合もすべてヲ格を用いて空間場所を標示する。

(117) a. 小明 顺着 小巷 跑 去。

xiǎo míng shùn zhe xiǎo xiàng pǎo qù

小明 に沿って 小道 走る ていく

(小明は小道を走っていく。)

b.??小明 绕着 操场 跑 去。

xiǎo míng rào zhe cāo chǎng pǎo qù

小明 を回って グラウンド 走る ていく

(小明はグラウンドに沿って走っていく。)

一方、中国語では例 (117a) と (117b) のように異なる介詞を用いるため、両者の相違は明白である。

このように、例 (116a) (117a) のように注目される空間場所が移動経路と重なる場合は、「ていく」「てくる」や“来”“去”を用いて主観方向を表すことができる。それに対し、図 6 のような注目される空間場所が移動経路の範囲を示す場合だと「ていく」「てくる」や“来”“去”は用いにくい。

図 5 タイプと図 6 タイプの間にある決定的な違いは以下である。

図 5 タイプは複数の空間場所に関わる移動すなわち境界を越える移動を表すことができるが、図 6 タイプはその移動が注目される空間場所とは別の空間場所に関わることを表すことができない。なぜなら、図 6 タイプでは注目される空間場所そのものが移動可能な範囲を示しているためである。

実際、「境界を越える移動と境界を越えない移動」の章でも言及したように、図 5 タイプと図 6 タイプの違いは以下のような場合においても見られる。

(120) a. 花子は山道を 30 分走ってようやく神社に着いた。

b.??花子はグラウンドを 30 分走ってようやく教室に着いた。

例 (120a) は図 5 タイプであり、例 (120b) は図 6 タイプである。例 (120a) では、「山道を走る」という移動行為自体は「山道」という一つの空間場所に行われるものであるが、その移動経路の延長として「神社に着いた」という移動の終点あるいは結果を表す要素が

付け加えられる。その結果として例（120a）は境界を越える移動表現として成り立ち、移動の他の空間場所との関わりが許される。

一方、例（120b）では移動が「グラウンド」という一つの空間領域に限定されている。そのため、「教室に着いた」という移動の結果を表す要素を付け加えると、他の空間領域に関わることで循環する移動経路との間に矛盾が生じ、不自然な表現になる。

4. 典型的な移動表現

4.1 主体移動と客体移動

主体移動とは移動主と動作主が一致である場合の移動のことである。それに対し、客体移動とは例（18）のように移動主と動作主が一致ではない場合の移動のことを指す。

(18) 李兰 把 球 扔 上 来 了。

lǐ lán bǎ qiú rēng shàng lái le

李蘭 ~を~する ボール 投げる 上げる ~てくる 完了

（李蘭はボールを投げ上げてきた。）

（Christine LAMARRE（2017:96））

主体移動は移動主と動作主が一致するため、移動が能動的なものである。したがって、主体移動表現は客体移動表現よりも典型的な移動表現に近い。

一方、客体移動は受動的なものであり、移動表現の中では一般的に使役形式で表される。松本（2017:19-20）は表 1 のような客体移動の下位分類を提示した。

表 1 客体移動事象の下位分類

パラメーター 下位分類	使役が起こる時間	使役者の移動	移動範囲
随伴運搬型	移動の期間中（継続的）	一緒に移動する	制約なし
継続操作型	移動の期間中（継続的）	移動しない（身体部位は移動あり）	小規模
開始時起動型	移動開始時のみ	移動しない	制約なし

（松本（2017:20））

例（121a）は開始時起動型であり、（121b）は随伴運搬型であり、（121c）は継続操作型

である。

- (121) a. Andrew threw a ball into the net.
b. Maria led the child to the school.
c. Peter picked up a book from the floor.

(松本 (2017:19))

中国語の場合、Christine LAMARRE (2017:119-120) は中国語における客体移動を表す動詞を客体移動事象のタイプによって以下の三つのグループに分けている。

①随伴運搬使役を表すのに使われる動詞。

随伴運搬の場合、動作主は移動主と共に動く。たとえば“搬 bān (運ぶ)”“开 kāi (車を運転する)”“送 sòng (とどける)”“拉 lā (引っ張る)”など (Christine LAMARRE (2017:119))。

②継続操作使役を表すのに使われる動詞。

継続操作使役は、動作主が移動を引き起こすがそれ自身の位置変化がないものである。たとえば“举手 jǔ shǒu (手を上げる)”の“举 jǔ”、“抬头 tái tóu (頭を上げる)”の“抬 tái”など (Christine LAMARRE (2017:118、120))。

③開始時起動使役を表すのに使われる動詞。

開始時起動使役は、動作主が移動主の移動を引き起こした直後に移動主が動作主から離れるものである。たとえば“踢 tī (蹴る)”“扔 rēng (投げる)”“投 tóu (投げる)”“丢 diū (投げる)”など (Christine LAMARRE (2017:120))。

日本語の場合、使役的経路動詞として「入れる」「出す」「上げる」「落とす」などが挙げられる。使役様態動詞として「流す」「飛ばす」「転がす」などが挙げられる (松本 (2017:259))。

4.2 主観移動と客観移動

客観移動というのは現実にかかる移動のことを指すが、主観移動とは現実には起こって

ないが、さも移動が起こっているかのような表現をとる移動のことを指す。主観移動表現は抽象的放射表現とも呼ばれているが（松本（2017））、本研究では主観移動表現と呼ぶ。

主観移動表現における移動主はほとんどの場合、実際に移動行為を行っているわけではない。第1章でも挙げた例（19）において、実際に移動するのは発話者の注視点であり、「街道」ではない。また、例（110）においても「I」が移動しているわけではなく、移動しているのが「I」の視線である。

（19）街道は、びわ湖の東岸の野を走っている。 （国盗り）

（110） I looked into the hole.

（松本（2017:21））

このように、主観移動は一般的に見る客観移動に比べ、移動としての典型性が低い。また、実際に起こる物理的な移動ではないため、主観移動は客観移動ほど表現が具体的ではない。

4.3 移動表現と非移動表現

移動表現と非移動表現の境界線はそれほど明確なものではなく、段階的に差異が見られるものだと考えられる。

本研究では境界を越える移動と境界を越えない移動、経路表現において明白な方向を示す移動と示さない移動、主体移動と客体移動、客観移動と主観移動を見てきた。

境界を越える移動表現は複数の空間場所に関わることで、境界を越えない移動表現よりも典型性及び具体性を有する。

経路表現という面において、明白な方向を有する場合の移動表現は明白な方向を示さない場合の移動表現よりも移動としての典型性を有する。

主体移動と客体移動の場合、主体移動における移動主は自発的に移動するため、受動的に移動する客体移動よりも典型性を有する。

最後に、主観移動は一般的に物理的に起こる移動ではないため、移動としての典型性及び具体性という点において客観移動に劣る。

移動としての典型性と具体性が高ければ高いほど、その移動表現は一般的な移動表現と

して捉えられる可能性が高い。逆に言えば、移動としての典型性と具体性が低いと、その移動表現は移動表現ではなく非移動表現（多くの場合は動作表現）として捉えられる可能性が高くなる。

4.4 移動図表

本研究では、移動表現としての典型性を判断するに際し以下の点を参考とする。条件を多く満足すればするほど典型性の高い移動表現であると見なされる。

- ①境界を越える移動である
- ②客観方向を有する移動である
- ③主観方向を有する移動である
- ④主体移動である
- ⑤客観移動である

しかし、以上に見る五つの基準は移動表現の典型性の判断においては平等に扱うべきではない。言語表現には例（122）のような静的な表現と例（123）のような動的な表現がある。例（123）のような動的表現はいわば変化を表す表現である。移動とは本来変化の一種であり、例（123）のような状態変化を表す表現とは共通する部分がある。移動とは物事的位置の変化を指す。

（122）今日はやけに寒い。

（高（2016））

（123）二人が話している間に、お茶はすっかり冷たくなった。

（高（2016））

したがって、上記で挙げた基準①の「境界を越える移動である」ということは移動の本質に関係するものである。境界を越えるということは、位置の変化は空間場所が変わるほど明白であることを意味する。そのため、基準①は移動としての典型性を判断する五つの基準の中でもっとも重要な基準の一つである。

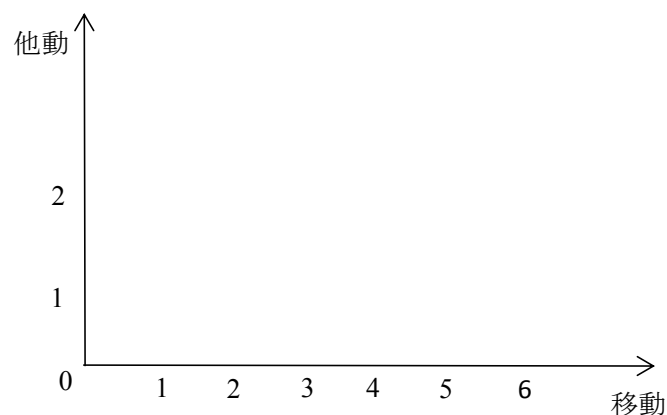
一方、基準②の「客観方向を有する移動である」も移動の本質に関わるため重要である。客観方向を示す移動表現では、移動主がある方向に向かうという位置の変化が起こっているという事実を表している。このように移動の本質を示すことができるため、基準②は五つの基準の中で基準①に続くもっとも重要な基準である。

基準②と同じく移動の方向に関係する基準③の「主観方向を有する移動である」であるが、それが示す主観方向は発話者の視点によるものであり、固有の方向関係によるものではないため、基準②よりは重要度が落ちる。

基準④⑤はそれぞれ物事の能動性や具体性に関わるものであり、移動の典型性を判断する基準としては不可欠である。能動性や具体性は移動表現のみならず、他類型の表現においても他動性などの判断で参考される基準の一つである。そのため、基準④⑤は移動の特徴と関わりを持たないが、基準①②③とは別の角度で移動の典型性を判断する基準として重要である。

本研究は、ある移動表現で観察される移動の典型性を以下のような図表として視覚化し、それを移動図表と呼ぶ。

表 2 移動図表



移動図表の x 軸を移動軸と呼び、y 軸を他動軸と呼ぶ。

基準①の「境界を越える移動である」、基準②の「客観方向を有する移動である」と基準

③の「主観方向を有する移動である」の判断結果は移動軸に反映し、基準④の「主体移動である」と基準⑤の「客観移動である」の判断結果は他動軸に反映する。

移動軸の場合、移動表現が基準①を満たせば 3 点数を得て、基準②を満たせば 2 点数を得て、基準③を満たせば 1 点数を得る。その移動表現が基準①②③で得た点数の和は移動軸の値として反映される。

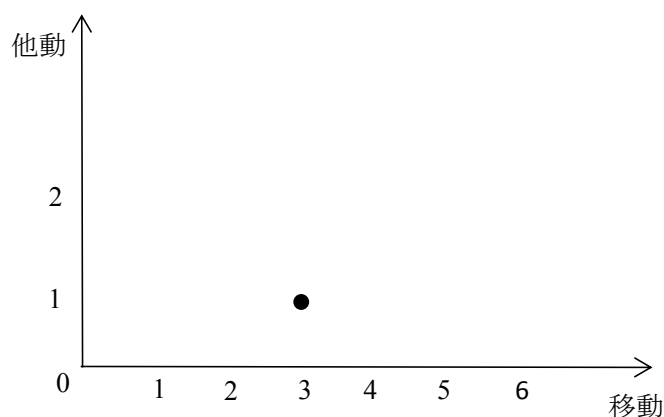
他動軸の場合、移動表現が基準④⑤のどちらでも満たせば 1 点を得て、全部満たせば 2 点を得る。その移動表現の点数は他動軸の値として反映される。

(124) 主人公はどんどん狂気に走っていく。

(<http://ncode.syosetu.com/n4367i/>)

例えば例(124)の場合、移動主は一見「主人公」であると思われるかもしれないが、実際に移動するのは主人公の精神である。そのため、例(124)は物理的に起こっているわけではない主観移動であり、基準⑤の「客観移動である」を満たさない。また、例(124)は複数の空間場所との関わりを示していないため基準①を満たさない。一方、移動主が向かう方向は「狂気」の領域というように明示されているため、基準②の「客観方向を有する移動である」を満たしている。また、「走っていく」というように主観方向を有するため基準③も満たしている。最後に、例(124)の移動主は自発的に狂気の領域に向かうため、基準④の「主体移動である」を満たす。

表 3 例(124)の移動図表



例（124）の点数を計算すれば、以下の移動図表を示すことができる。黒い点は例（124）を表す。黒い点の移動図表での位置（ $x=3, y=1$ ）は例（124）の移動の典型性の程度を表している。

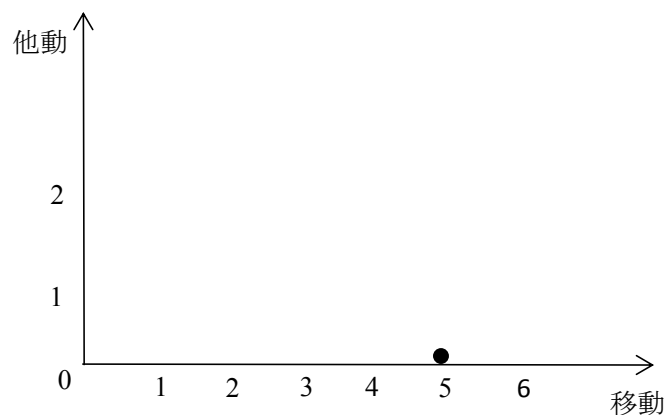
一方、例（125）は基準①②を満たしているが、「風景」という抽象的なものが受動的に移動するため基準④⑤のどちらも満たさない。

（125）世界各国から集まったテレビカメラがこの風景を「緊急ニュース」という形で世界中に伝えた。

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/ベルリンの壁崩壊>)

したがって例（125）の値は（ $x=5, y=0$ ）であり、移動図表に示すと以下になる。

表4 例（125）の移動図表



以上のように、移動図表を用いるとある移動表現の典型性を視覚化することができる。

5. 日本語と中国語における移動表現

本章では移動図表を用いて、日本語と中国語における移動表現を形式ごとに考察する。
移動図表で用いられる五つの基準は以下である。

- ①境界を越える移動である
- ②客観方向を有する移動である
- ③主観方向を有する移動である
- ④主体移動である
- ⑤客観移動である

基準①の「境界を越える移動である」、基準②の「客観方向を有する移動である」と基準③の「主観方向を有する移動である」の判断結果は移動軸に反映し、基準④の「主体移動である」と基準⑤の「客観移動である」の判断結果は他動軸に反映する。

移動軸の場合、移動表現が基準①を満たせば 3 点数を得て、基準②を満たせば 2 点数を得て、基準③を満たせば 1 点数を得る。その移動表現が基準①②③で得た点数の和は移動軸の値として反映される。

他動軸の場合、移動表現が基準④⑤のどちらでも満たせば 1 点を得て、全部満たせば 2 点を得る。その移動表現の点数は他動軸の値として反映される。

5.1 “在”

一般的に見る“在”が様態移動動詞と共起する場合の表現として、例（54）が挙げられる。

(54) 我 走 在 熙熙攘攘的 大街 上。

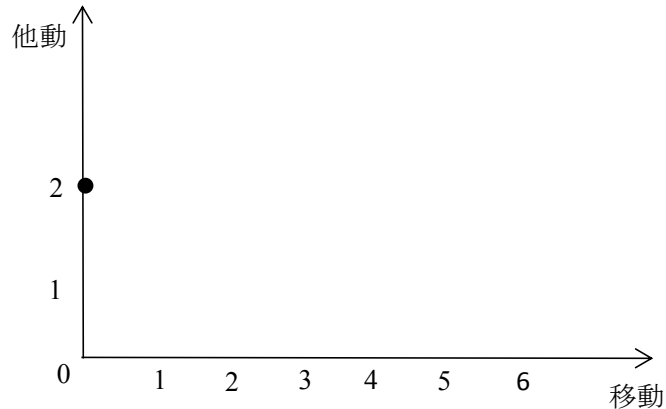
wǒ zǒu zài xī xī rǎng rǎng de dà jiē shàng

私 歩く “在” 賑やかな 大通り 方位詞

(私は賑やかな大通りを歩いている。)

例（54）は基準④⑤を満たしているため、移動図表での位置は（x=0, y=2）になる。例（54）の移動図表は以下である。

表 5 例（54）の移動図表



“在”が様態移動動詞及び方向補語と共起する場合の表現として、例（55）が挙げられる。

(55) 无数的 影子 在 我 面前 走 过。

wú shù de yǐng zǐ zài wǒ miàn qián zǒu guò

無数の 影 “在” 私 目の前 歩く 過ぎる

（無数の影が目の前を通り過ぎる。）

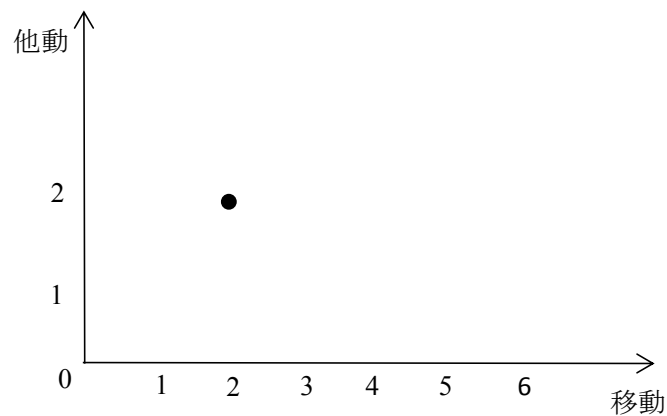
（盗墓）

方向補語の“过 guò”は客観方向を示すことができる。“过 guò”が示す客観方向は起点や着点のようなものではなく、注目される空間場所に接近してから離すという起点と着点の方向関係を組み合わせたような複合的なものである。

例（55）は“过 guò”によって客観方向を示すようになり、基準②を満たす。他にも基準④⑤を満たしているため、移動図表での位置は（x=2, y=2）になる。例（55）の移動図

表は以下である。

表 6 例 (55) の移動図表



“在” の場合はその性質上、基準①の「境界を越える移動である」も、基準③の「主観方向を有する移動である」も満たすことができない。そのため、“在” が用いられる移動表現は移動軸での最大値は 2 までである。

5.2 “順（着）”・“沿（着）”・“绕（着）”

中国語の介詞の“順（着）”・“沿（着）”は基本的に同じような性質を有するため、“沿（着）”のかわりに“順（着）”の場合のみを挙げる。

(60) …帆船 顺着 轻风 缓缓 航行。

fān chuán shùn zhe qīng fēng huǎn huǎn háng háng

…帆船 に沿って そよ風 緩やかに 航行する

(…帆船はそよ風にしがたって緩やかに航行する。)

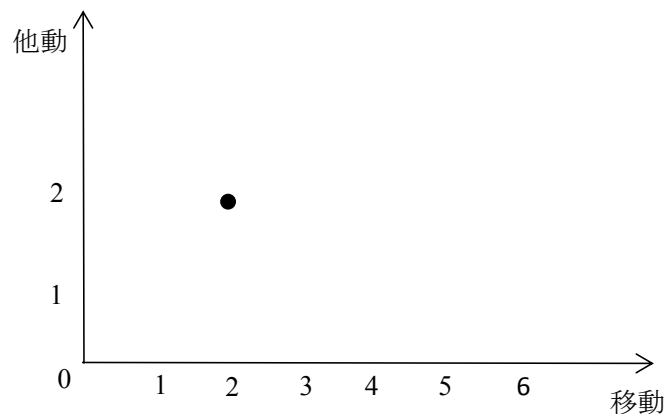
(高龙巴)

例 (60) は基準②④⑤を満たしている。例 (60) が基準②を満たしているのは、“順（着）”

によって移動と空間場所との方向関係が明白になっているためである。その場合、空間場所そのものが移動の経路あるいは軌跡である。

例（60）の移動図表での位置は（ $x=2, y=2$ ）である。例（60）の移動図表は以下になる。

表 7 例（60）の移動図表



移動の結果あるいは終点を表す要素が加わった“順(着)”文の場合の表現として、例(62b)が挙げられる。

(62) b. 他已经 顺着 这条路 走 出 迷宫。

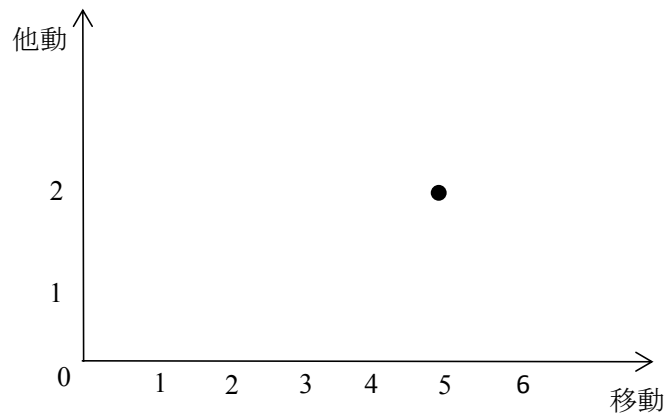
tā yǐ jīng shùn zhe zhè tiáo lù zǒu chū mí gōng

彼 もう に沿って この道 歩く 出る 迷路

(彼はもうこの道に沿って迷路を出ていった。)

例（62b）は基準①②④⑤を満たしているため、移動図表での位置は（ $x=5, y=2$ ）になる。例（62b）の移動図表は以下である。

表 8 例（62b）の移動図表



一方、一般的に見る“绕（着）”が用いられる移動表現として例（61）が挙げられる。

（61）…孩子们 绕着 石柱 奔跑。

hái zǐ men rào zhe shí zhù bēn pǎo

子供たち を回って 石柱 走る

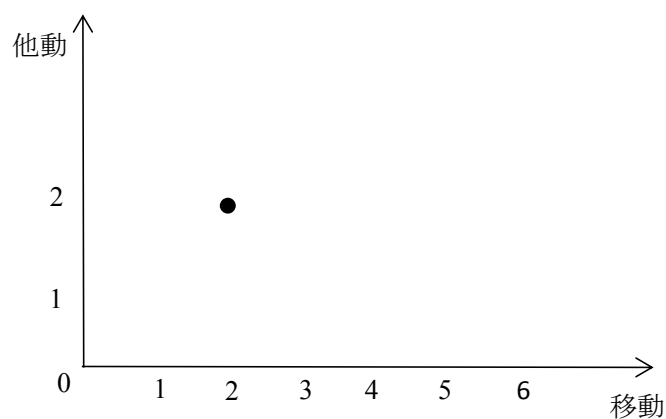
（…子供たちは石柱を回りながら走っている。）

（文化）

例（61）は基準②④⑤を満たしているため、移動図表での位置は（x=2, y=2）になる。

例（61）の移動図表は以下である。

表 9 例（61）の移動図表



“绕（着）”は循環する移動経路を標示するという特殊な性質から、基準①の「境界を越える移動である」も、基準③の「主観方向を有する移動である」も満たすことができない。その点において“绕（着）”は“在”と共通しているが、“绕（着）”は“顺（着）”と同じように移動と空間場所との方向関係を客観方向として示すことができる。

5.3 “从”

一般的に見る“从”が用いられる移動表現として例（66）が挙げられる。

(66) 人们 从 四面八方 向 火堆 走 来。

rén men cóng sì miàn bā fāng xiàng huǒ duī zǒu lái

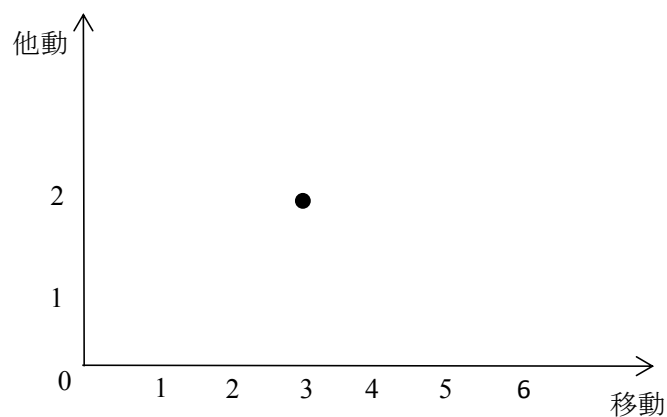
人々 “从” 四方八方 に向かって たき火 歩く 来る

（人々が四方八方からたき火のところへやって来た。）

（『白水社 中国語辞典』）

例（66）は基準②③④⑤を満たしているため、移動図表での位置は（x=3, y=2）になる。例（66）の移動図表は以下である。

表 10 例（66）の移動図表



また、例（70）のような移動表現もある。

(70) 从 这儿 能 过去 吗？

cóng zhè ér néng guò qù ma

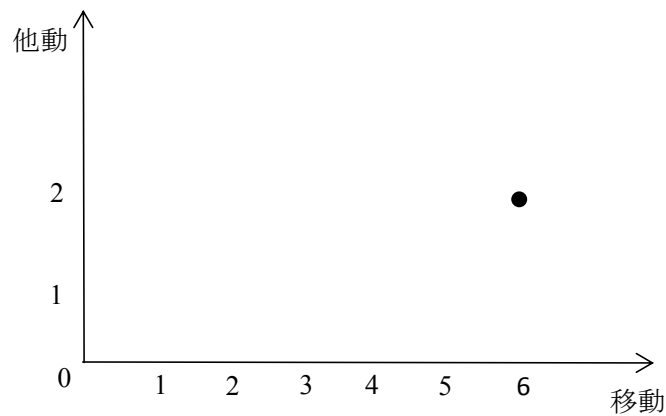
“从” ここ 可能 渡る か

（ここから/ここを渡れますか？）

（丸尾（2005:140））

例（70）は基準①②③④⑤を満たしているため、移動図表での位置は（x=6, y=2）になる。例（70）の移動図表は以下である。

表 11 例（70）の移動図表



“从”と“顺（着）”・“沿（着）”・“绕（着）”はいずれもそれ自身で移動と空間場所との方向関係を客観方向として示すことができる。そのため、それらが用いられる移動表現は移動軸での最小値は2である。

しかし、“从”は“顺（着）”・“沿（着）”・“绕（着）”と異なり、移動の距離や終点などを示す文中の要素がなくても基準①を満たすことができる。

5.4 フ格構文

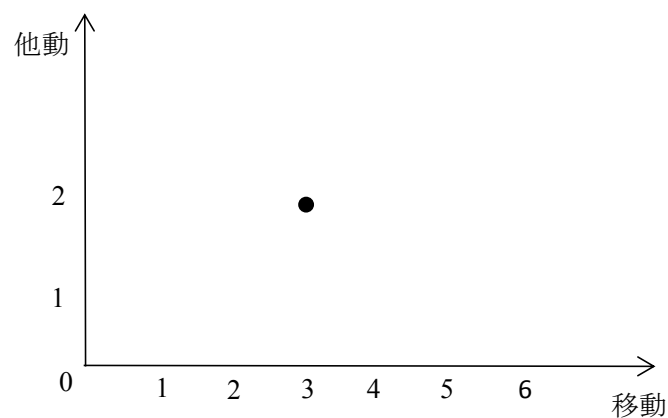
フ格が用いられる経過域指向の移動表現として、例（96）が挙げられる。

（96）子供たちは、よろこんでそのまはりを飛んだりはねたりしました。

（狼森）

例（96）は基準②③④⑤を満たしているため、移動図表での位置は（x=3, y=2）になる。例（96）の移動図表は以下である。

表 12 例（96）の移動図表



フ格が用いられる経過点指向の移動表現として、例（126）が挙げられる。

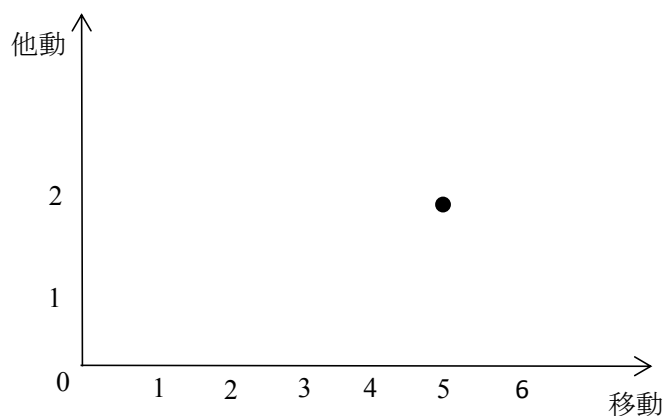
（126）傾斜の緩い河沿いの段丘を辿って行くと、落葉松の若芽が浅緑に萌え、青葉を背景とした白樺の白い幹は益々白い。

（溪三題）

例（126）は基準①②④⑤を満たしているため、移動図表での位置は（x=5, y=2）になる。基準①が満たされるのは風景の発見という移動の結果を示す要素があるためである。

例（126）の移動図表は以下である。

表 13 例（126）の移動図表



また、例（127）のような表現もある。

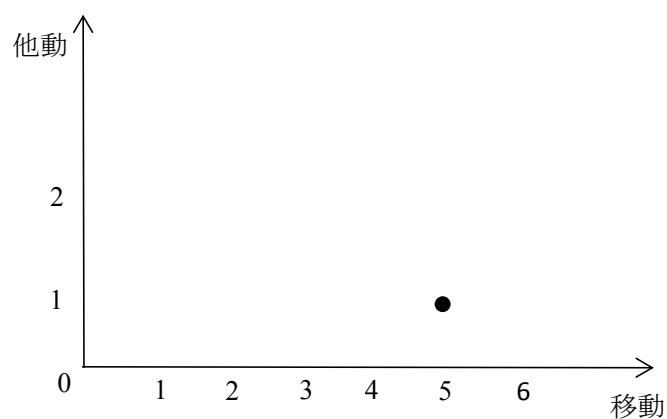
（127）この両者の縫合線は、…南は樺沢岳附近に至り、北は御山谷の屈曲点附近を過ぎて
いるとのことである。

（「黒部峡谷」）

例（127）は基準①②④を満たしているため、移動図表での位置は（x=5, y=1）になる。

例（127）の移動図表は以下である。

表 14 例（127）の移動図表



例（127）と例（126）は移動図表において、互いに他動軸での1点の差しか持たない。
しかし例（127）と例（126）を見て分かるように、例（127）は問題なく移動表現として捉えられるが、例（126）は人によっては移動表現として認識されない可能性がある。

このように、移動表現の他動軸での値は大きく移動表現としての典型性に関係する。

5.5 デ格構文

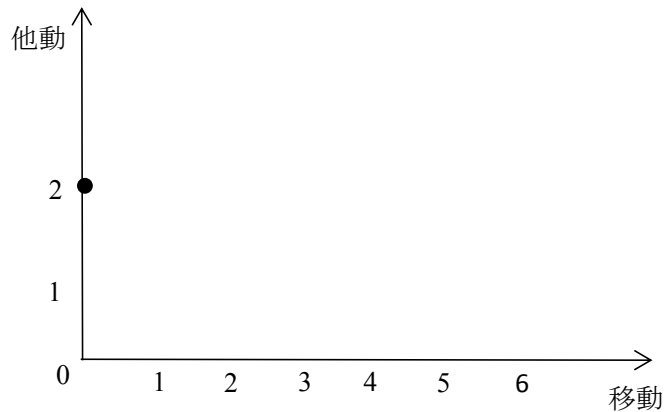
デ格は移動表現で用いられる場合は例（103）のような表現がほとんどである。

（103）お店で歩き回る幼児をどうにかして欲しい。

（発言小町 <http://komachi.yomiuri.co.jp>）

例（103）は基準④⑤しか満たしていないため、移動図表での位置は（ $x=0, y=2$ ）になる。
例（103）の移動図表は以下である。

表 15 例（103）の移動図表



形式から見ると、デ格は中国語の“在”とはある程度対応しているが、“在”の表現では客観方向を許容できるのに対し、デ格は客観方向を許容することができない。

したがって、デ格を用いる移動表現の場合、それが移動軸で得る値は0である。

6. おわりに

本研究では日本語と中国語における各場面の中間経路指向の移動表現を中心に考察することで、日本語と中国語における移動表現の異同について検討した。

まず、移動表現で用いられて移動行為が行われる場所を標示する場合、中国語の“在”介詞構造と日本語のデ格構文は形式の角度から見ると共通する部分がある。中国語の“在”介詞構造と日本語のデ格構文は共に境界を越える移動を表すことができない。また、両者とも主観方向を許容できない。しかし、中国語の“在”介詞構造は客観方向を許容できるのに対し、日本語のデ格構文は客観方向を許容できない。その他に、移動としても動作としても捉えられうる一部の移動行為に関して、もしそれを移動だと捉えたとするならば、中国語ではそれが境界を越えない移動だと認識されているものの、日本語ではそれが境界を越える移動だと認識される傾向があると思われる。

次に、同じく形式的に対応しているとされる中国語の VL 形式と日本語のヲ格構文の場合、VL 形式は V が L を支配することにより、たとえ V に様態移動動詞がくるとしても必ず結果を有するすなわち境界を越える移動を表す。それに対し、ヲ格構文は V に様態移動動詞がくる場合に境界を越えない移動を表すことができる。ここで注意すべきなのは、中国語における“跑操场 pǎo cāochǎng（グラウンドを走る）”というように VL 形式は様態移動動詞を取りながらも境界を越えない移動を表すことができるが、それは恐らく V と L の組み合わせがイディオム化で意味が特定化し一つまとまった行為として認識されるためだと考えられる。その証拠に、“跑 pǎo（走る）”のかわりに“走 zǒu（歩く）”を入れ替えると意味不明な表現になる。一方、日本語のヲ格構文は「グラウンドを走る」の他に、「グラウンドを歩く」「庭を飛びまわる」などといった表現ができるというように、VL 形式より高い生産性を有する。

このように同じく他動性を表す表現形式でありながらも、VL 形式とヲ格構文では V が L を支配する際に注目が置かれる焦点が異なる。中国語は VL 形式が移動事象を表すに際して他動性により移動における位置変化の範囲が空間場所を貫通しており、すなわち移動行為が空間領域を渡るような形を取るため、移動事象に完了性が求められる。それに対し境界を越えない移動を表す際には“在”や“从”介詞構造あるいは“绕（着）”のような具体的な移動経路を示す介詞構造を用いる。

一方、日本語のヲ格構文の場合、位置変化の範囲は移動動詞の性質により決まる。経路

移動動詞がVにくると移動行為は注目される空間場所の境界を越えるが、様態移動動詞がVにくると移動は空間場所に沿って行われるか、境界を越えない前提で空間場所全体を移動範囲として行われるかのように経路を取る。

また、様態移動動詞文は一見して無規則な経路を取るが、「グラウンドを走る」では「トラックに沿って走る」ことを、「公園を散歩する」では「公園の道に沿って歩く」ことを含意するように、実際のところ移動経路が暗示されることがある。このように経路移動動詞と様態移動動詞とそれぞれ共起するヲ格移動表現の相違及び様態移動動詞内部における相違からは、日本語のヲ格構文においてVがLを支配することにより移動経路が注目されていることが分かる。それに対し、中国語では“沿（着）”“顺（着）”“绕（着）”などのような介詞を用いて具体的な移動経路あるいは軌跡を表すしかない。

以上のように、中国語と日本語は中間経路指向の移動を表す際、たとえ部分的に対応する形式であってもそれぞれ異なる着目点を有し、注目する移動の局面にも相違が見られる。

最後に、移動図表を見て分かるように、中間経路指向の移動表現における移動としての典型性は一貫性がなく、高い典型性を有する移動表現もあれば低い典型性を有する移動表現もある。そのことから、中間経路指向の移動表現は移動表現と非移動表現（特に動作表現）の中間地帯だと言える。また、移動としての典型性は位置の変化のみでなく他動性に大きく左右される。

本研究では主に中間経路指向の移動表現を中心に考察した。しかし、起点指向・着点指向の移動は一般的に移動としての典型性が高い分、中間経路の場合とは異なる非移動表現（状態変化など）との関わりを有する可能性が高い。それをいかに検証し解釈するかは今後の課題とする。

参考文献

- 荒井文雄 1992 「移動動詞の意味構造とアスペクト極性」『京都産業大学国際言語科学研究
所所報』14(1) pp.55-105
- 池上嘉彦 1993 「<移動>のスキーマと<行為>のスキーマ——日本語の「ヲ格+移動動詞」
構造の類型論的考察——」『外国語科研究就要』41 巻 3 号 pp.34-53
- 池上嘉彦 2008 「主観的把握：認知言語学から見た日本語話者の一側面」『昭和女子大学大
学院言語教育・コミュニケーション研究』3 pp.1-6
- 伊地智善継（編）2002 『白水社 中国語辞典』白水社
- 市川保子（編）2010 『日本語誤用辞典：外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と
指導のポイント』
- 伊東朱美 1998 『言語の理解と産出—日本語の照応表現を中心に—』大阪大学言語文化
研究科博士論文
- ウェスリー・M・ヤコブセン 2001 「他動性とプロトタイプ論」『動詞の自他』ひつじ書房
pp.166-178
- 王 軼群 2009 『空間表現の日中対照研究』くろしお出版
- 岡田幸彦 2013 『語の意味と文法形式』笠間書院
- 影山太郎 2001 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
- 片山晴一 2009 「日本語と英語の移動事象における経路」『日本語研究教育年報』13 pp.25-43
- 加藤重広 2006 「対象格と場所格の連続性：格助詞試論（2）」『北海道大学文学研究科紀要』
118 pp.135-182
- 川野靖子 2001 「ヲ格句を伴う移動動詞句について—アスペクト的観点からの動詞句分類に
おける位置づけ—」『日本語と日本文学』第 33 号 pp.25-38
- Christine LAMARRE 2017 「中国語の移動表現」『移動表現の類型論（シリーズ言語対照：
外から見る日本語 7）』くろしお出版 pp.95-128
- 高 一波 2014 『日本語と中国語の移動表現について—中間移動経路表示を中心に—』
大阪大学言語文化研究科修士論文
- 高 一波 2016 「移動性から見る移動表現」『日本語・日本文化研究』26 号 pp.62-71
- 杉村博文 2000 「“走进来”について」『荒屋勸教授古希記念 中国語論集』白帝社 pp.151-164
- 杉村 泰 2006 「イメージで教える日本語の格構文」『言語文化論集』27(2) pp.53-65

- 鈴木 忍 1978『教師用日本語教育ハンドブック(3) 文法Ⅰ 助詞の諸問題 1』 国際交流
基金
- 高橋弥守彦 2005「“走過來”“走過去”の“過”について」『語学教育研究論叢』22 pp.157-187
(大東文化大学語学教育研究所)
- 田中茂範・松本曜 1997『日英語比較選書第6巻 空間と移動の表現』研究社
- 丹保健一 1998 「『ヲ出る』『カラ出る』の文法(2)」『三重大学教育学部研究紀要・
人文・社会科学』49 pp.17-25
- 張麟 声 2001『日本語教育のための誤用分析 中国語話者の母語干渉20例』スリーエー
ネットワーク
- 寺村秀夫 1990『外国人学習者の日本語誤用例集』大阪大学
- 方 美麗 2004『「移動動詞」と空間表現 統語論的な視点から見た日本語と中国語』白帝
社
- 馬 建設 1988「中国語の介詞<在>について」『福井工業大学研究紀要』18号 pp.369-375
- 益岡隆志・田窪行則 1987『日本語文法セルフ・マスターシリーズ 3 格助詞』くろ
しお出版
- 松本 曜(編) 2017『移動表現の類型論(シリーズ言語対照:外から見る日本語7)』くろ
しお出版
- 丸尾 誠 2005『現代中国語の空間移動表現に関する研究』白帝社
- 三宅知宏 1995「カラとヲ——起点の格標示——」『日本語類義表現の文法(上) 単
文篇』pp. 67-73 くろしお出版
- 姚 艷玲 2003「日本語における「ヲ格+移動動詞」と「空間・場所名詞句」との結びつき
関係」『比較社会文化研究』第14号 pp.63-72
- 姚 艷玲 2004「日本語の「ヲ格+移動動詞」構文と対応する中国語表現」『比較社会文化
研究』第15号 pp.129-139)
- 陈 昌来 2002.《介词与介引功能》安徽教育出版社
- 孟 庆海 1986.〈动词+处所宾语〉,《中国语文》第4期 pp.261-266
- Jackendoff, Ray. 1983. *Semantics and cognition*. Cambridge, Mass: MIT Press. [2]
- Slobin, Dan I. 2004. The many ways to search for a frog. *Relating events in narrative, Vol. 2:*

Typological and contextual perspectives, ed. By Sven Strömquist and Ludo Verhoven, pp.219-257. New Jersey/London: Laurence Erlbaum Associates.

Talmy, Leonard. 1985. "Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms". *Language Typology and Syntactic Description*, vol. III, *Grammatical Categories and the Lexicon*, T. Shopen (ed.), Cambridge: Cambridge University Press, pp.57-149

Talmy, Leonard. 2000. "A Typology of Event Integration". *Toward a Cognitive Semantics*, vol. II: *Typology and Process in Concept Structuring*, Cambridge, MA: The MIT Press, pp.213-288

用例出典

(石段) 小川未明 1924 (出版年 1977) 『石段に鉄管』 講談社

(海辺) 村上春樹 2002 『海辺のカフカ』 新潮社

(狼森) 宮沢賢治 1924 「狼森と策森、盗森」『注文の多い料理店』 杜陵出版部・東京光原社

(科学) 小酒井不木 1922 (出版年 2004) 「科学的研究と探偵小説」『小酒井不木探偵小説選』 論創社

(国盗り) 司馬遼太郎 1971 『国盗り物語』 新潮文庫

(溪三題) 木暮理太郎 1924 「溪三題」『山の憶い出 下』 平凡社

(デンマーク) 北大路魯山人 2008 「デンマークのビール」『魯山人の美食手帖』 角川春樹事務所

(メイン・テーマ) 片岡義男 1983 『メイン・テーマ』 角川書店

(桜) 坂口安吾 1947 (出版年 2008) 『桜の森の満開の下』 岩波文庫

(盗墓) 南派三叔 2007 《盗墓笔记》 中国友谊出版公司

(高龙巴) 梅里美 (傅雷 译) 1985 《高龙巴》 人民文学出版社

- （海边）村上春树（林少华 译）2003《海边的卡夫卡》上海译文出版社
- （老人）海明威（吴劳 译）1999《老人与海》上海译文出版社
- （绿野）莱曼·弗兰克·鲍姆（陈伯吹 译）1953《绿野仙踪》少年儿童出版社
- （文化）余秋雨 2001《文化苦旅》东方出版中心
- （倚天）金庸 1961（出版年 1999）《倚天屠龙记》三联书店